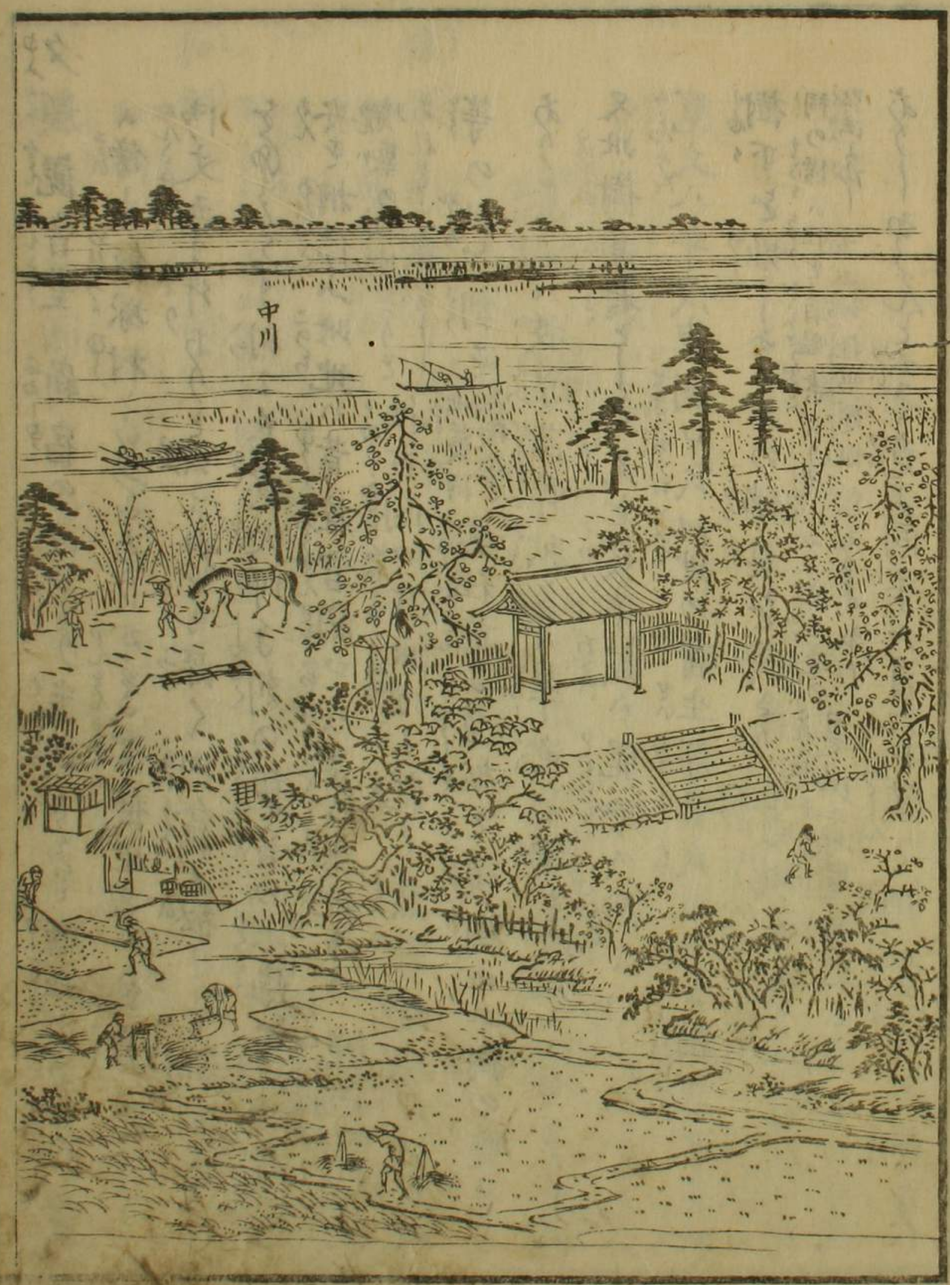
浪花

戸谷所圖會

ル 4
3218
20

中川
門ル4
3218
巻 20
昭和九年七月六日


中川

多賀観音堂

夕顔観音堂　新宿の渡口より半道ばかり西北の方中川の堤に傍く飯塚村とかつよあり本尊聖観世音八金像にして
丈五寸許りと云されとも深く内龕に秘して拜
を許さす別に慈覚大師自刻の観音の木像を以て龕前に
安置相伝へ此地ハ昔荘官関口氏某の采地なり
墳墓の旧址なりと往古関口氏此地に就く熊野権現及ひ水神
等の社を創せ（此叢祠今存ス）其社前に老松と榎樹の二樹の雙立せる
あり春夏ハ枝葉焦悴秋冬ハ翠色を増せ人以て奇とす
又此樹間時とゝく光を発し或ハ龍燈の状に似たるを見る
寛文八年戊申関口氏此地の醫生深谷氏と共に相謀りて此
樹下を掘しに一二の佛具を得たり（深谷氏ハ紀州の産にして其頃製七日温泉に年相似たり神祠の傍に住せ翁温素より信心やゝ日蓮の弘法に入り妙経唱題懈怠あるなし）是必古時此地に有名の寺院
ありしかんと云く竟に同年六月六日謹く猶此土中を掘しに

金像の大非の像一軀を獲たり（佛像背面に弘長二年二月仍直ふ七字を刻せり）
深谷氏の家に移し假に佛壇に安置し相好端厳実に凡工の
所造に出ること和あり然に前宵深谷氏老翁媼共に夢の
應あるを以て奇とす竟に此地を開く草堂を
営み此霊像を迎へ奉る
（按に世に夕顔観音の像ハ執爪の中に出現せりと称ありとも或云云紫式部の会持佛なりとも此地の縁起に載せて異し何の故ふ夕顔の物あるやと云ふ）

猿俣　新宿より北の方の邑名なり

神鳳抄曰　猿俣御厨　下総國　百八十丁　新御厨在之云云

北条家永禄二年所領役帳に窪寺大蔵丞と云人葛西猿俣四十九貫文の地を領す葛西今武蔵國に属す古ハ下総國なり古書に猿俣と書かるゝの故

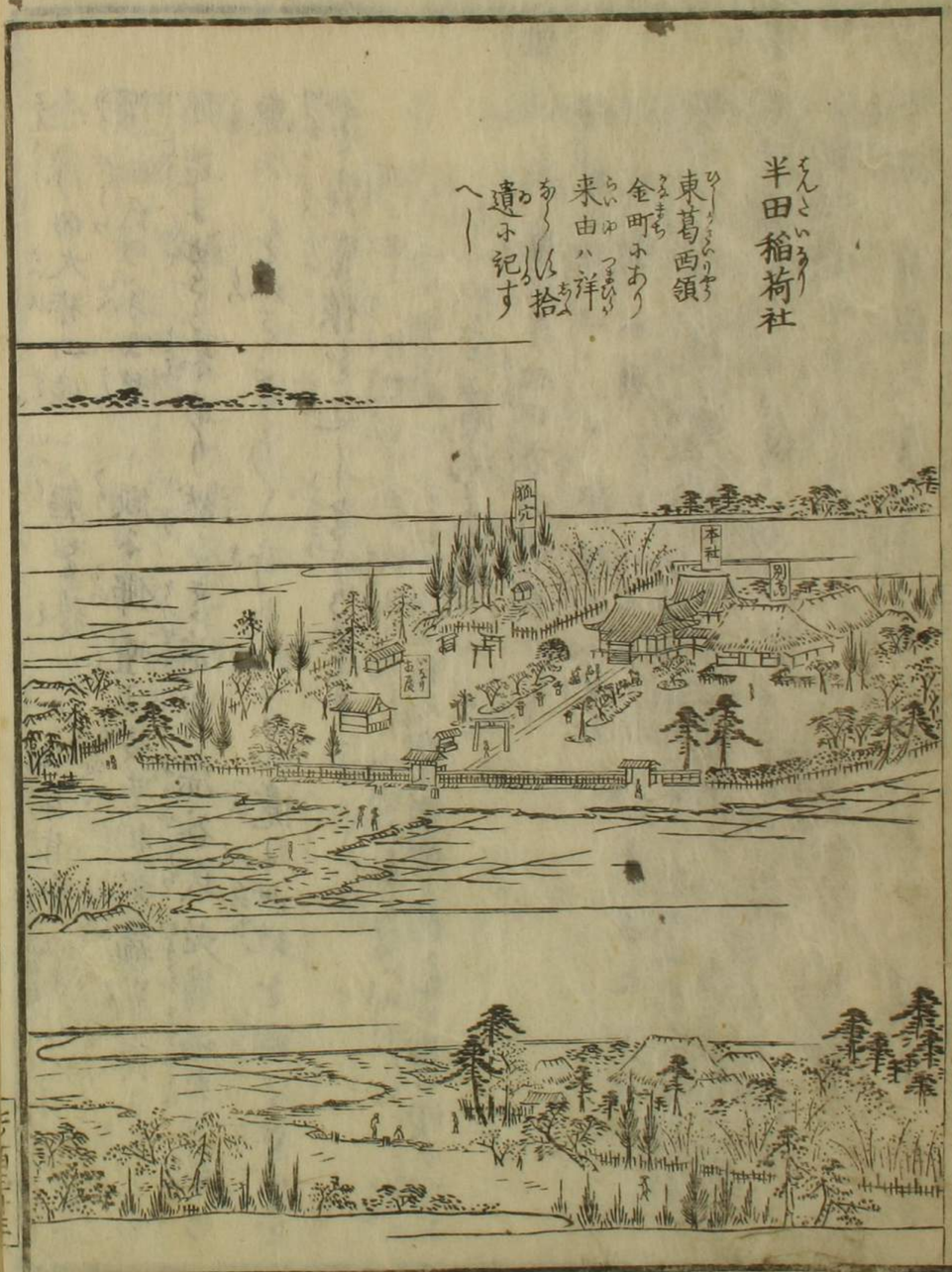
和銅寺廃址同所にあり　佛生山と号し真言の古蓮ふ

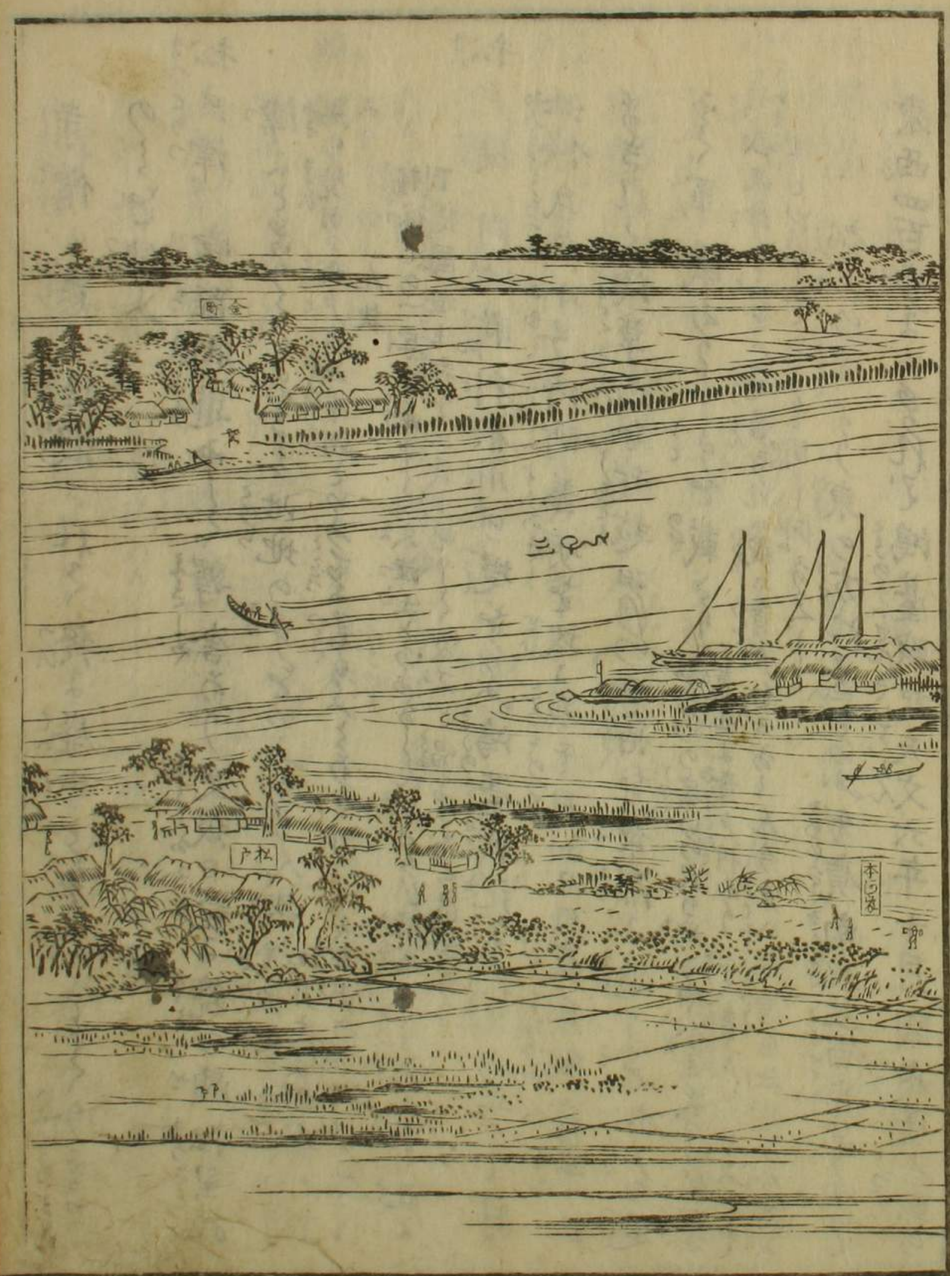
和銅年間の草創なりしと云伝へ中古迄も伽藍巍々たりしふ

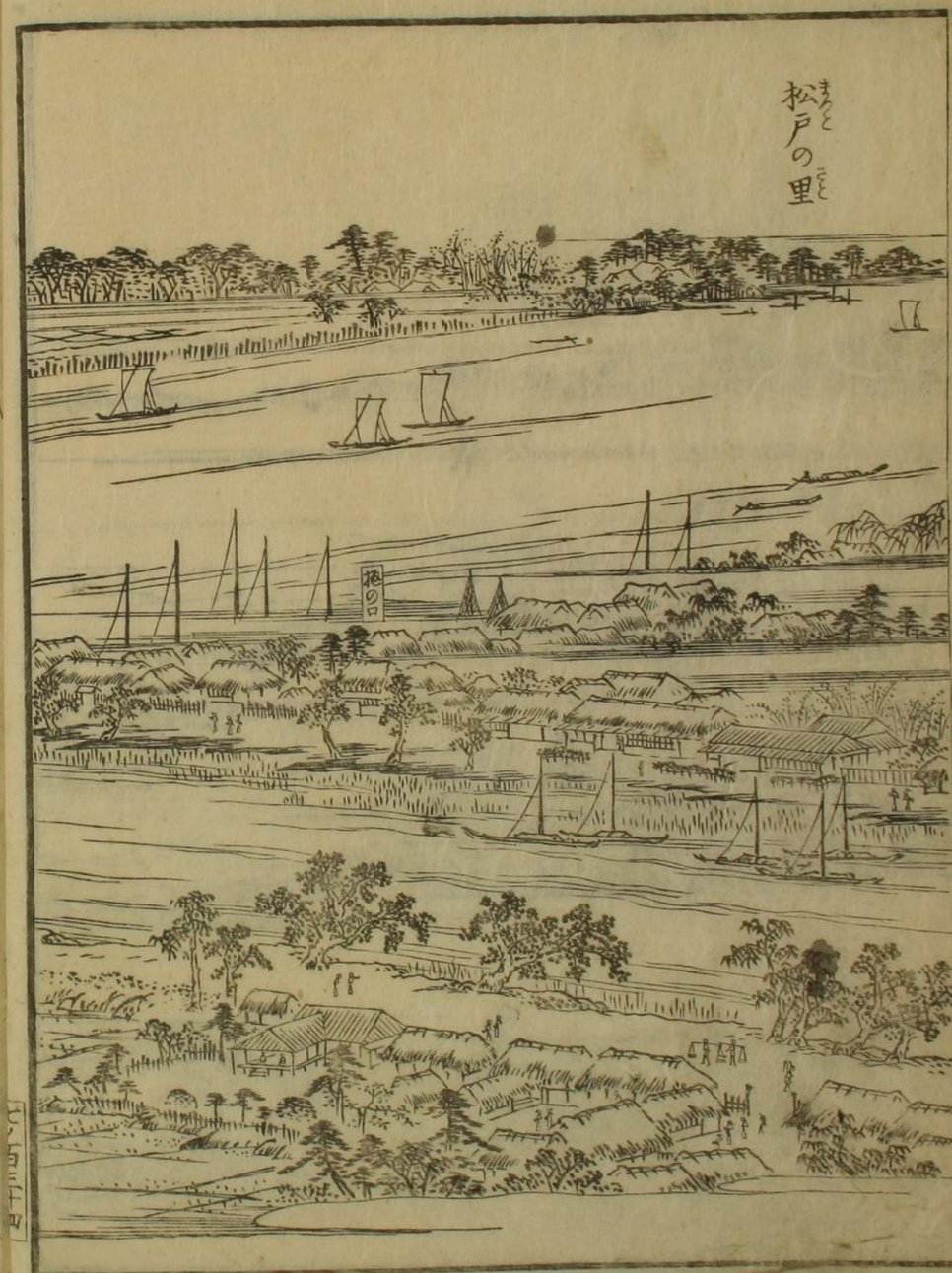
天文六年國府臺合戦の時兵火の為ふ灰燼となりく

半田稲荷社

東葛西領金町ゆあり
来由ハ詳拾遺ゆ紀すへし




三ケ浦
戸松
本ヶ浦


まつと
松戸の里
掩の口

寺僧も悉く退散されく終に廃寺となりそのまゝ今に号
のみを伝へ

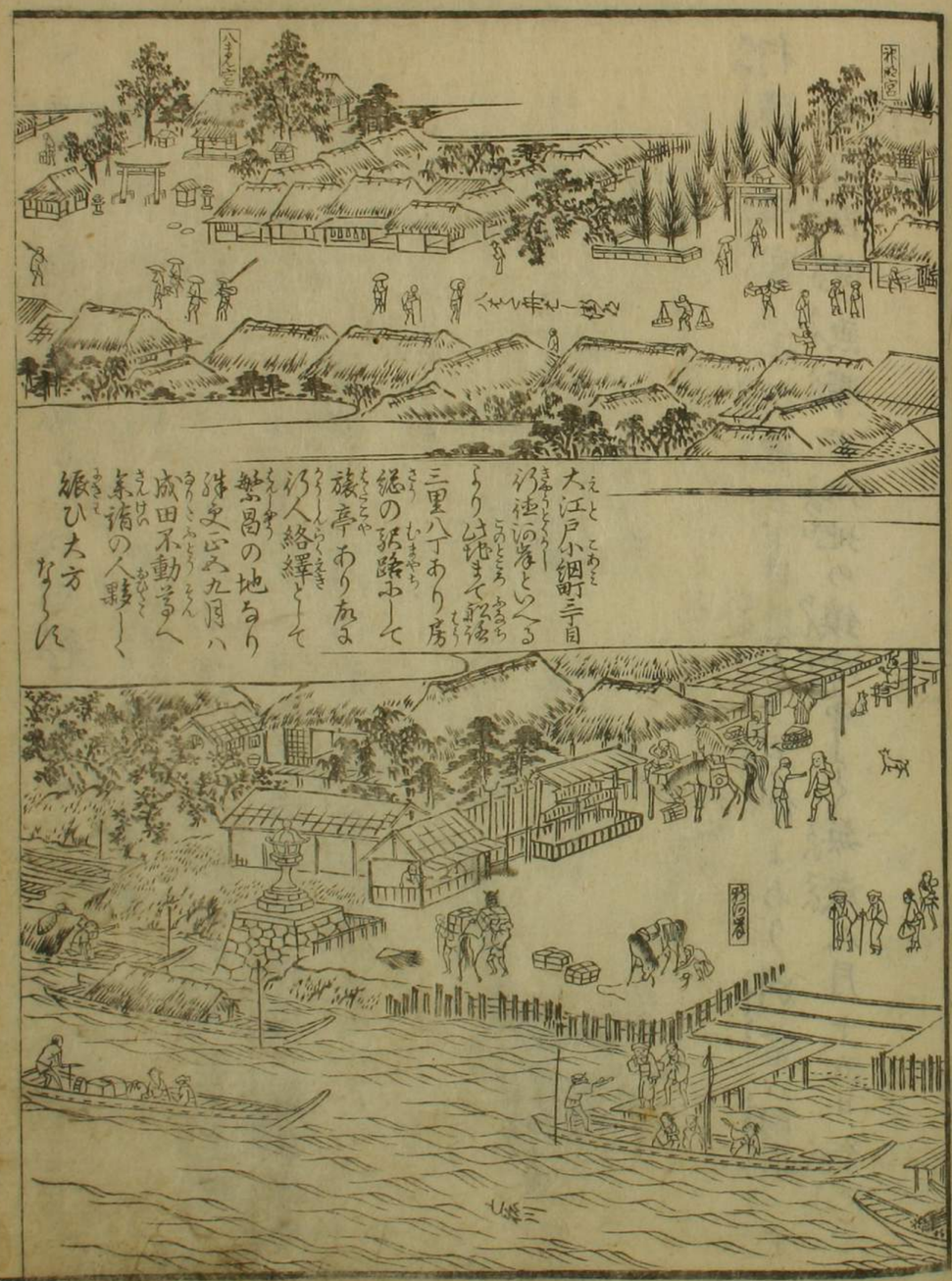
松戸津　常陸街道ゆく驛舍あり更級日記に鏡の瀬松里より
津にとありくとあるこゝ此地のことをいふなり欽　義経記に治承四年九月十一日武蔵と下
総の境なる松戸の庄市河といふあり　松戸の庄の名みゆ
（按ずるに一字を略し末津土と唱へたる是なり　下総國垣生郡を土民中略し波不と唱へたる是なり）

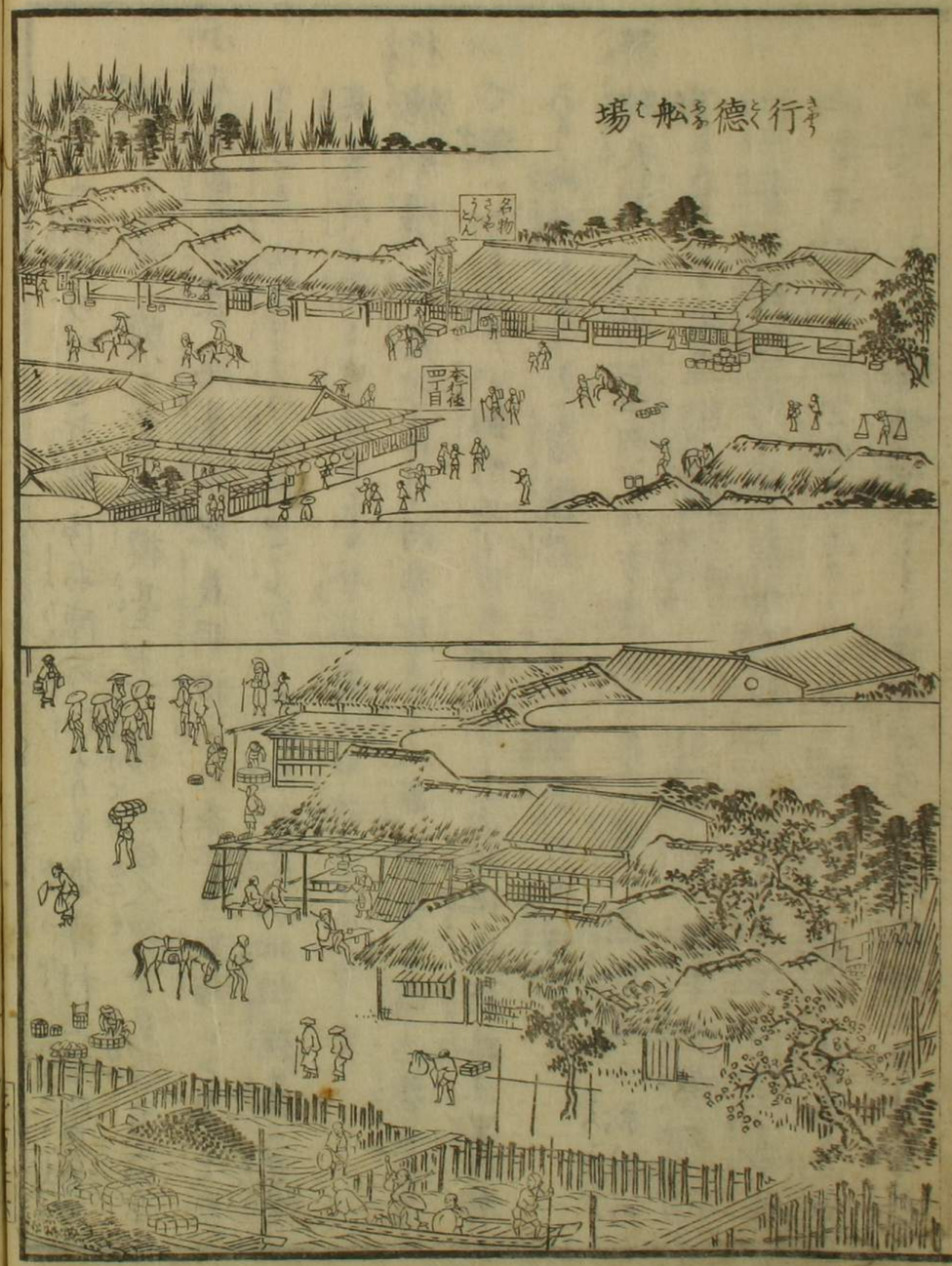
松戸堤　同所新利根川の堤をいふ鴻臺戦記に天文六年十月
北條氏綱小弓御所義明を攻る須臾月四日の夜氏綱夜半に
まぎれく浅草川を打越現つの宿を夜深に通りて松戸の堤
ゆく軍議ありしことを載せり
（唱ふ又津と戸とハ通音なれハ或ハ青戸を云なり　葛西に青戸村あり　今津と戸とハ同例なり　今戸八幡宮の社記に今戸ハ
相模臺　松戸の驛より東の方れ臺をいふ廣南北五百歩ばかり
東西四百歩ばかりなれて鴻臺戦記天文六年十月國府臺合戦の

条下に松戸の川を打越渚の陣の内にも推津村上堀江鹿島を
始とし〻五十騎ばかりなる相模臺に打揚敵の人数を見合せとあり
小弓御曹子墓　鴻臺戦記義明滅亡の条下に乳母レンセイとい
ふ女房御曹子の亡屍を見もとめ人目を忍ひ此相模臺に来る
其墓所に詣る由記せしも今其墓の旧跡さだかならず

行徳船場　行徳四丁目の河岸なり土人新河岸と唱へ旅舍あり
て賑ハへり江戸小網町三丁目の河岸より此地迄船路三里八町
あり此所もまた房総常陸等の國々への街道なり

辨財天祠　同所四五町下の方湊村にあり昔ハ潮除堤の松林の
下にあり（石田地を弁天山と号し石の小祠あり）今ハ円明院に移せり正徳年間
江戸青山梅窓院の順誉唯然和尚此神の霊応より享保
三年戊戌宮居を建立ありしとなり祭る所ハ藝州嚴島の市神
小同じく市杵島姫神ゆく海神村の阿諏訪神ハ男神尚社ハ


八幡宮
不動堂
大江戸小網町三丁目
江戸の岸といへる
ゆうり山地まで延伸
三里八丁あり房
総の往路ふして
旅亭あり旅
客人絡繹として
繁昌の地なり
毎年三月九月ハ
成田不動尊へ
参詣の人夥しく
賑ひ大方
なし


行徳船場
名物
さやうどん
参拾
四丁

女神と称せ神田あり弁天兎と唱ふ

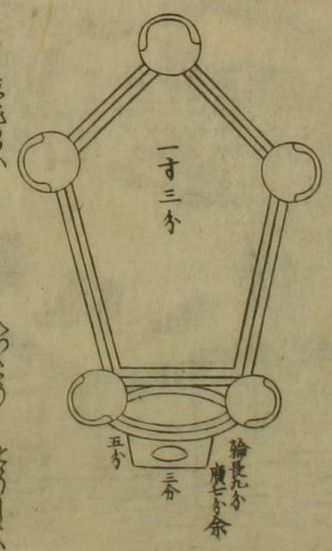
船霊宮　画像一幅　探信の筆　古地大船

入津の湊あり此神を崇むるとなり

古鈴一口　湊村青　暘山善照寺といふる浄刹ゟ収蔵せり芝増上

寺ゟ属せ開山ハ覚誉上人と号せ慈覚大師彫造の観音湛慶

の作の焔王又法然上人鑑御影と称せるものあり



竹量五十二銭目餘

唐銅のめくゆく甚古色あり

惣長サ三寸二分剣の裏延板

鈴大サ三寸　回り内ハ小石一ツ宛

あり　鈴の口一寸八分　剣先より

元まて二寸三分

行徳八幡宮　本行徳三丁目道より右側ゟあり別當ハ同所一丁

目自性院兼帯せ此地の鎮守ゆゑ毎歳八月十五日祭祀を

行ふ

神明宮　同所一丁目街道の左側ゟあり此地の鎮守とせ別當ハ

真言宗ゆゑ自性院と号す毎歳九月十六日を以て祭祀の

辰とす其祭ゟ伊勢内宮の土砂を迂しく内外両皇大神

宮を勧請しまる相伝ふ当社昔ハ川向中洲と云地ゟあり

しを後此所へ迂せしゆゑ又此地を金海の森と号く慶長十九年

甲寅金海法印といふる沙門此地ゟ一宇の寺院を開創して

金剛院と号ス依て金海の森とのゆゑ　金剛院今ハ廃せり

按ゟ葛西志といふる書ゟ行徳ハ金剛院の開山某

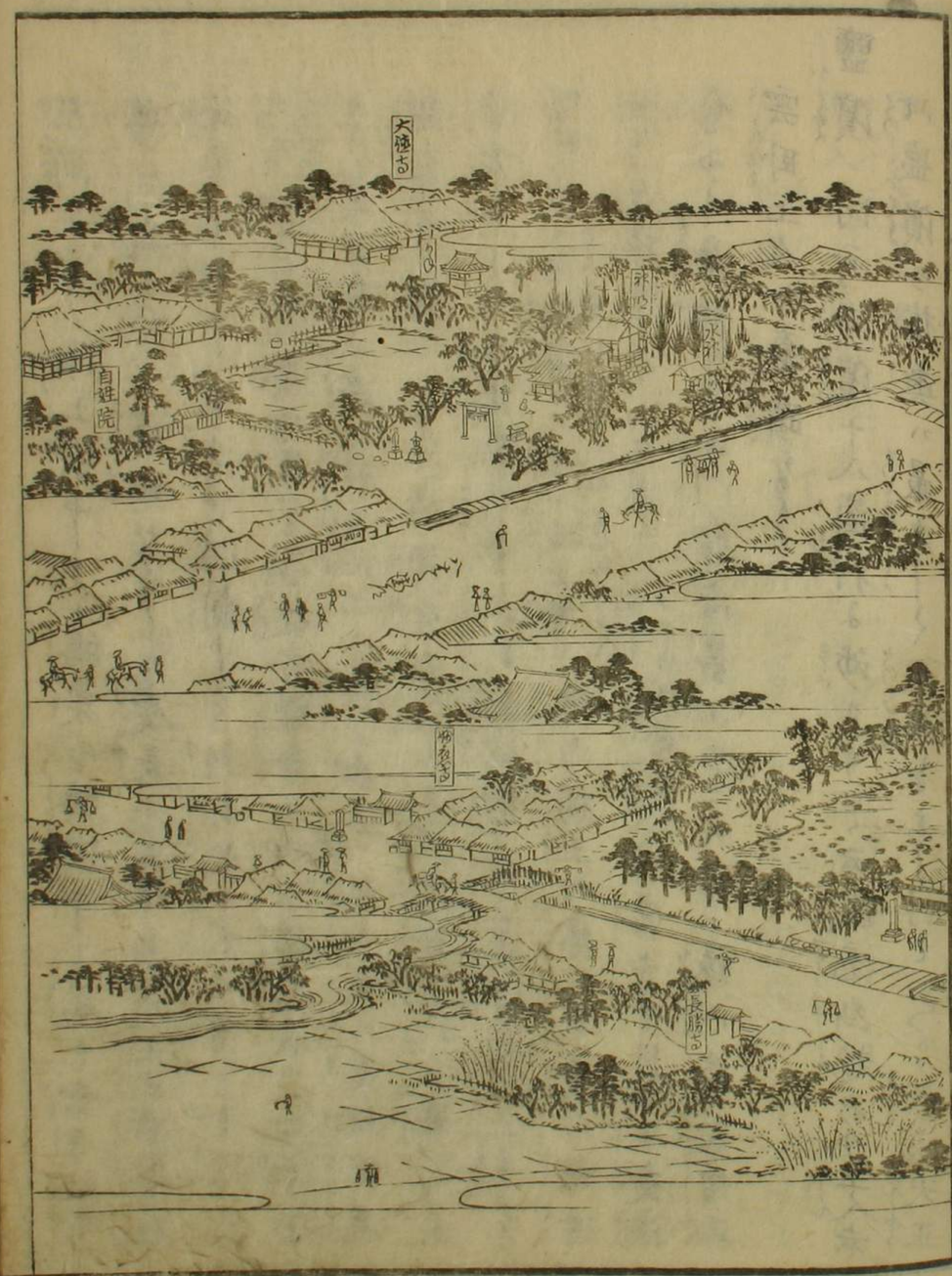
行徳の地名と由記せり

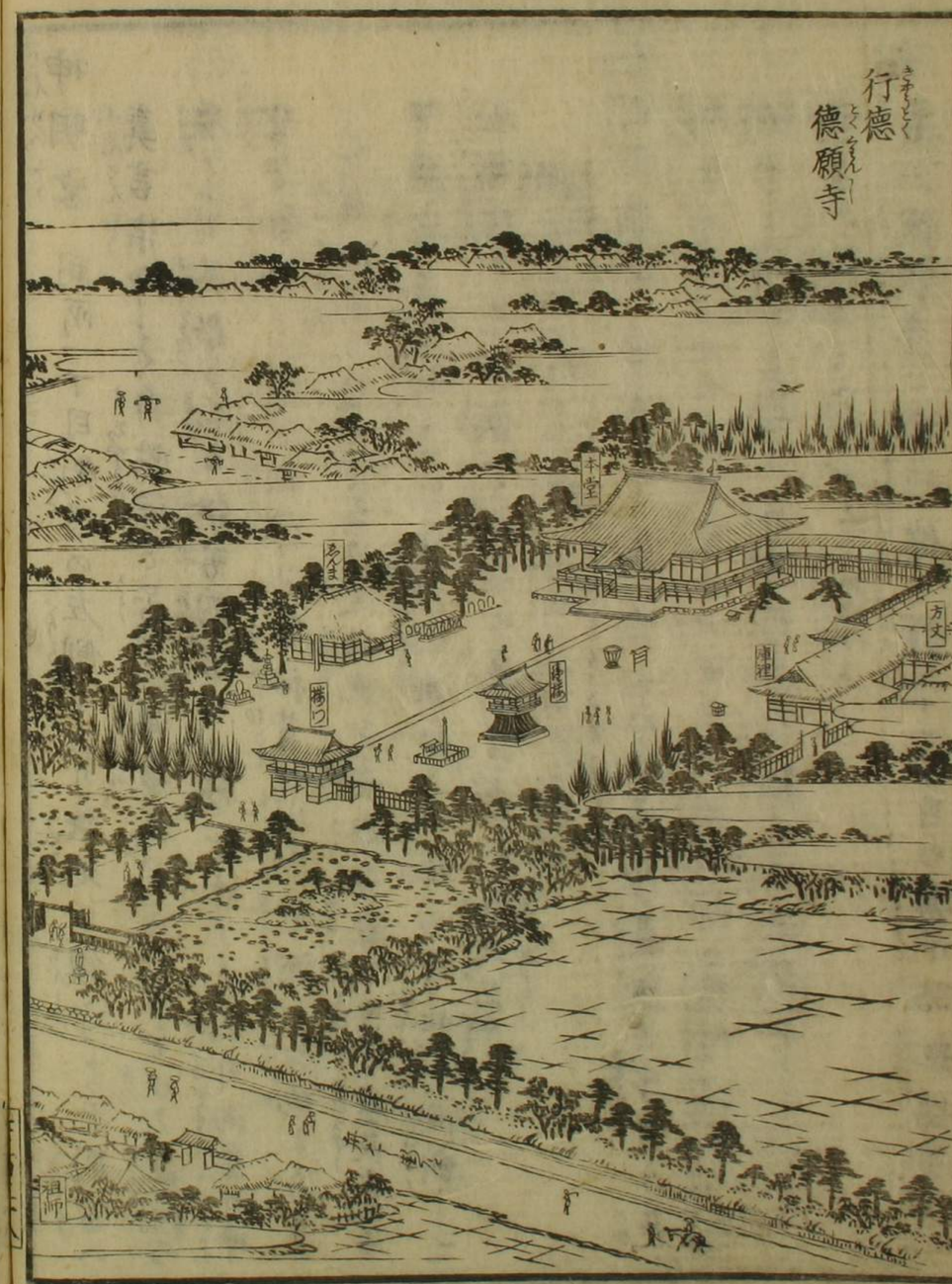
金剛院廃址　当寺より南の方ゟあり御形屋敷と字せり是

則先ゟいふる処の金剛院の旧地なり金剛院ハ羽州羽黒山法

漸寺ゟ属せしゆゑ其昔形徳有験の山伏住ゆゑ此地名とのゆゑ云伝ふ

海巌山徳願寺　本行徳の驛中一丁目の横小路舟橋間道の

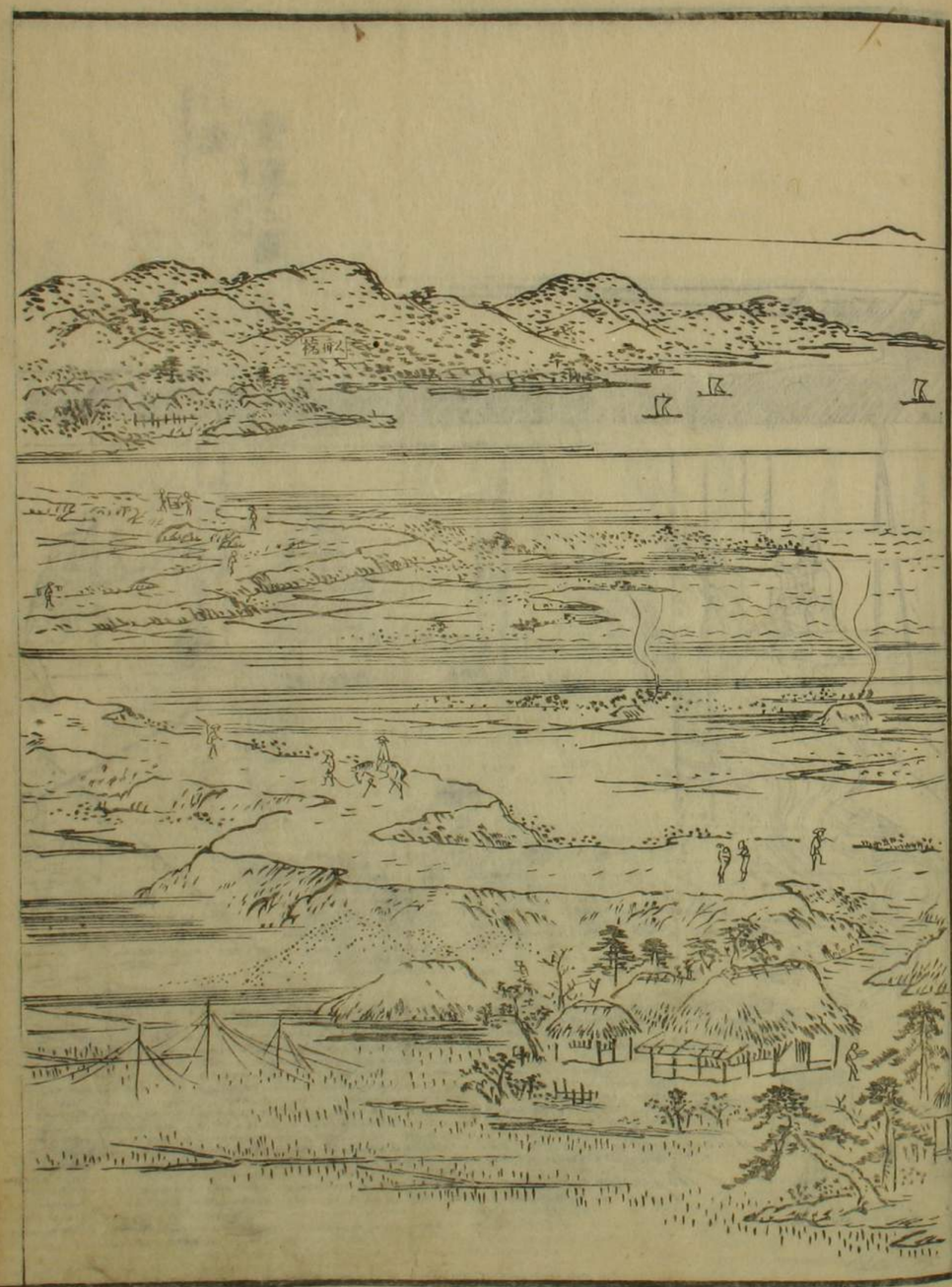

大徳寺
自性院

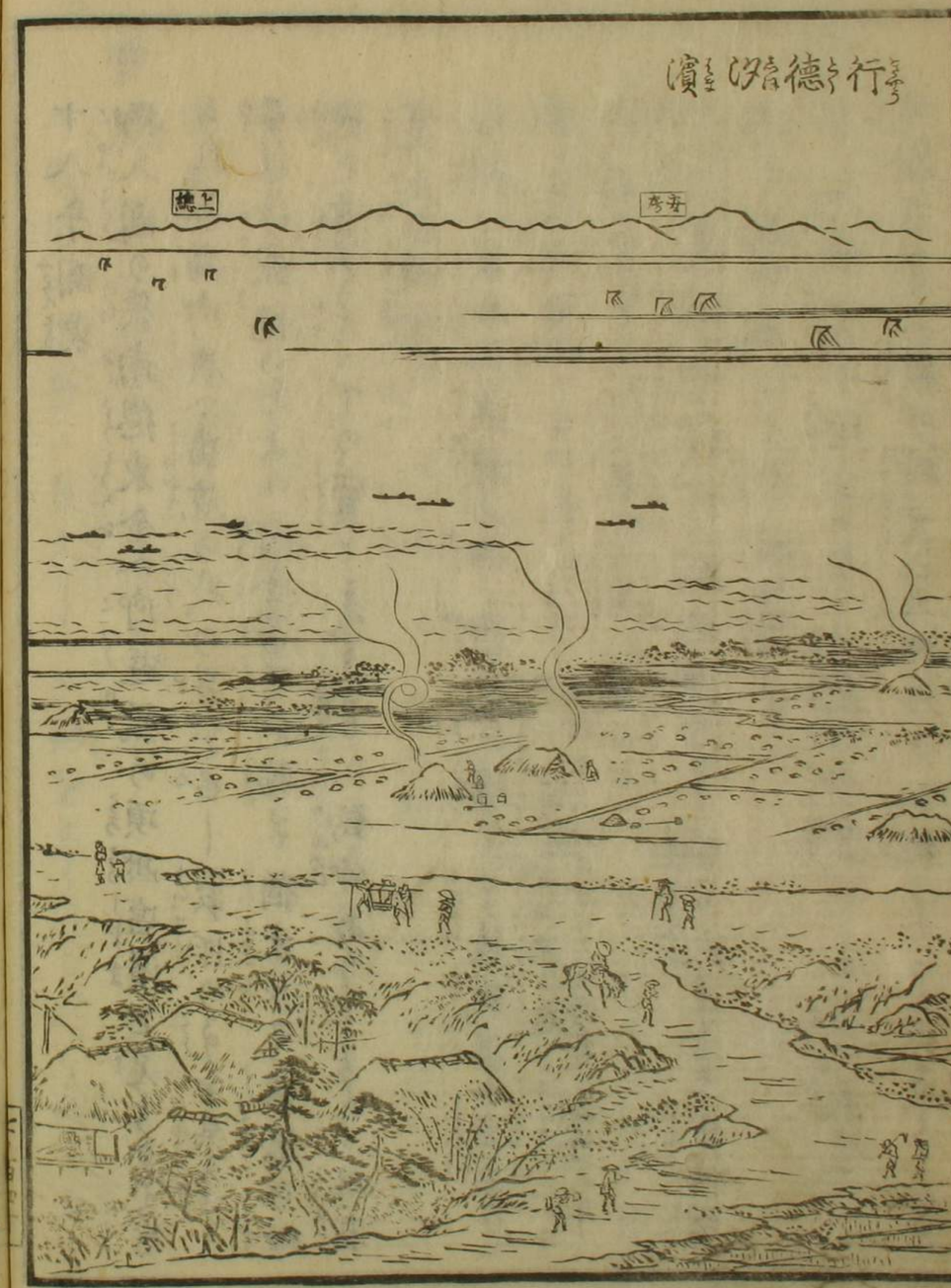

行德
德願寺
本堂
方丈
鐘楼
祖師

左側よあり浄土宗ゆゝく鴻巣の勝願寺より屬せ當寺往古ハ
普光庵とゝつる草庵なりゝゝ慶長十五年庚戌開山聰蓮社
円誉不残上人寺院を開創しゝく阿弥陀如来の像をかゝるとゝ
丈三尺寺院 佛工運慶の作なり往古鎌倉二位の禪尼政子の命よ
り是を造る遥の後天正十八年よあり一品大夫人崇源院殿
鎌倉より移しゝゝひ御持念ありしゝう後大超上人よ賜りゝ又
當寺弟二世正蓮社行誉忠残和尚當寺よ安置なしゝゝと
なり十七世晴誉上人殊よ道光普く境内閻王の像ハ運慶の彫造
四方よ溢れ信心の徒多しと毎年正月七月の十六日當寺十月ハ十夜法
あり座像ゆゝく八尺あり 会ハ無釋集す
會ゆゝく最賑ゝゝ山門額海巌山の三大字ハ縁山前大僧正
雲臥上人の真蹟なり

鹽濱 同所海濱十八箇村よ渉りと云風光出趣あり土人去
此塩濱の権輿ハ最久しゝく始を志ゝるとゝ然ゝ天正

十八年関東
御入國の後南總東金へ御遊獵の項此塩濱を見そかもせ
られ船橋御殿へ塩焼の賤の男を召しゝ製作のすを具よ賞し
召れ御感悦のあまり御金若干を賜ゝ猶未永く塩竈の煙
絶せ営ゝく天ゝ下の寶と旨 釣命ありしゝり以来
寛永の頃迄ハ
大樹 東金御遊獵の砌ハ御金拝賜ゝ後風浪の災ありし
頃も修理を加へゝつるといゝ
御入國の後日あゝ此邪徳の塩濱へ事跡合考よ云此地よ塩を焼すハ九一千
制ゝらゝ由ゝ今の小奈木川ハ題 有餘年よあれりと又同書よ天正十八年
此地の塩鍋ハ製他ハ越堅强ゝく保ゝ久しゝく東八州
悉く是を用ひゝく食料の用とせ
甲宮 行徳入口の縄るゝあり来由今知へゝす土人或伝へく
云國府臺合戦の時某の大將の塊を紀ゝとゝあゝん歟




濱江德行
德化
安彦

行德
鹽竈之圖

行徳鵠

當社八幡宮の別當兼帯を記す

因光大師鏡影　行德の東の海濱高谷村淨土宗了極寺

に安置す因光大師鏡を照し自己の姿をうつし畫こと

師影なりといふ　土俗錦の淨影とも稱せり　當寺は大僧正祐天和尚真影の

塔婆あり　寄特　摺人得仰す

長島湊　葛西長島と一雙の地あり　昔此地を長島殿と稱せ領主

梵音寺　靈蹟の廢址あり　観音　相伝ふ太田道灌の項ハ國府臺の湊より船を

泊す其後野州奥州常州總州名の國々高瀬舟の便利よき

を用ひしより利德へ運送するとハ知りとふ

永祿二年小田原北条家の分限帳に太田新六郎所領の中に葛西長島高

新城と云く　万葉集に補ふ作り活字板　旧名を太井河とふ　此号更級日記　東鑑等の書ふ見え

利根川　源平盛衰記　利根と作れり　義経記下総國かつしかの郡の中に大河あり　ぬこ井といふ河の東をハ葛東の

郡といひしの西をハ葛西の郡といふ　又清浦奥義抄云下総國かつしかの郡の中に大河あり　私に云此河の西ハ葛西と稱し

今武蔵國に属す　北条五代記國府臺合戦の条下にハかつしかの川といふ　或ハ文类川又かつしかの河とも唱へ

世俗坂東太郎と称し

行德を流れ南方に利德川とも号く水源ハ上野國利根郡文殊

嶽の出谷より發し高科川吾妻川烏川碓井川及び信州の

國郡より出る所の諸流合し武州幡羅郡に至て一河となる

又上州渡瀬川も利根に落合栗橋より分流し一流ハ北総に

入開宿木下等の地に傍く東流し銚子に海に帰せり　是を新利根川と称す

利根川と号く　坂東太郎　一流ハ武蔵下總の間を南へ流れ國府

臺の下を行德の方へ曲流し海に帰せり　川と称す

按ふ侍中群要に散位を刀祢と称す

と云く公事根源云大節に刀祢ハ六位を云とあれとも古へハ

刀祢とのみ五位以上を補任の官と称し

称職なり是ハ倭國の六府縣能刀祢男女に至て主典以上ハ長上の官なり

延喜祝詞式に倭國の六府縣能刀祢男女に至て主典以上ハ長上の官なり

里長ハ今なとも刀祢と稱ふ　播州日岡明

神に毎歳正月初午日大頭とのみを勤む郷刀祢と称し田家三十六人の

内より是を仕とむ各六位中明神の供奉職なり　又五節の舞

あり　悉く刀祢の役なり　馬の勒の天神の祢職

なるも刀祢とよへり　後拾遺集雜神祇部　菊池長能の冠書ゆも里八

とて宣旨ありて祭はじまりつることありと刀祢と云まうく物の頭をつとめ称
揚する辞なくてもすなはち是をおもてとあきらかに称すべし されバ此川も
坂東第一の洪河なる流なれバ坂東の河の頭なる意をとりて刀祢と云号くるうけ
へし 世俗坂東川を西國太郎といひ此河を坂東太郎とよびしも 皇朝一双の大河
と称するも其流の頭なるべし 或人云 利根川ハ上野国利根郡 文殊嶽より発
源ぞ 文殊の智慧の利根の意をとると是又かる附会の説なるべし 皇朝文字を借
用ひて借く字例あれハ刀祢を利根に作るともあるべしさりとす

万葉集
刀祢河泊乃可波世毛思良受多多和多里奈美
爾安布能須安敝流伎美可母

神楽註秘抄
篠 本
ひさかたのはくしえさとと称りたるなきたれるとえきるはさ
末
篠はけハ神こそしれぬと称川の在るゆゑとも我かよりより
此篠はけハの和語ハ新勅撰廿九番の中に橘仲遠歌として刀祢の
入られたり接するに本には称とありて末には称川とよまれり
教に拠あるに似たり

夫木抄
とねの川の下ハそこりてありもせてありてもせてやさ
よみ人

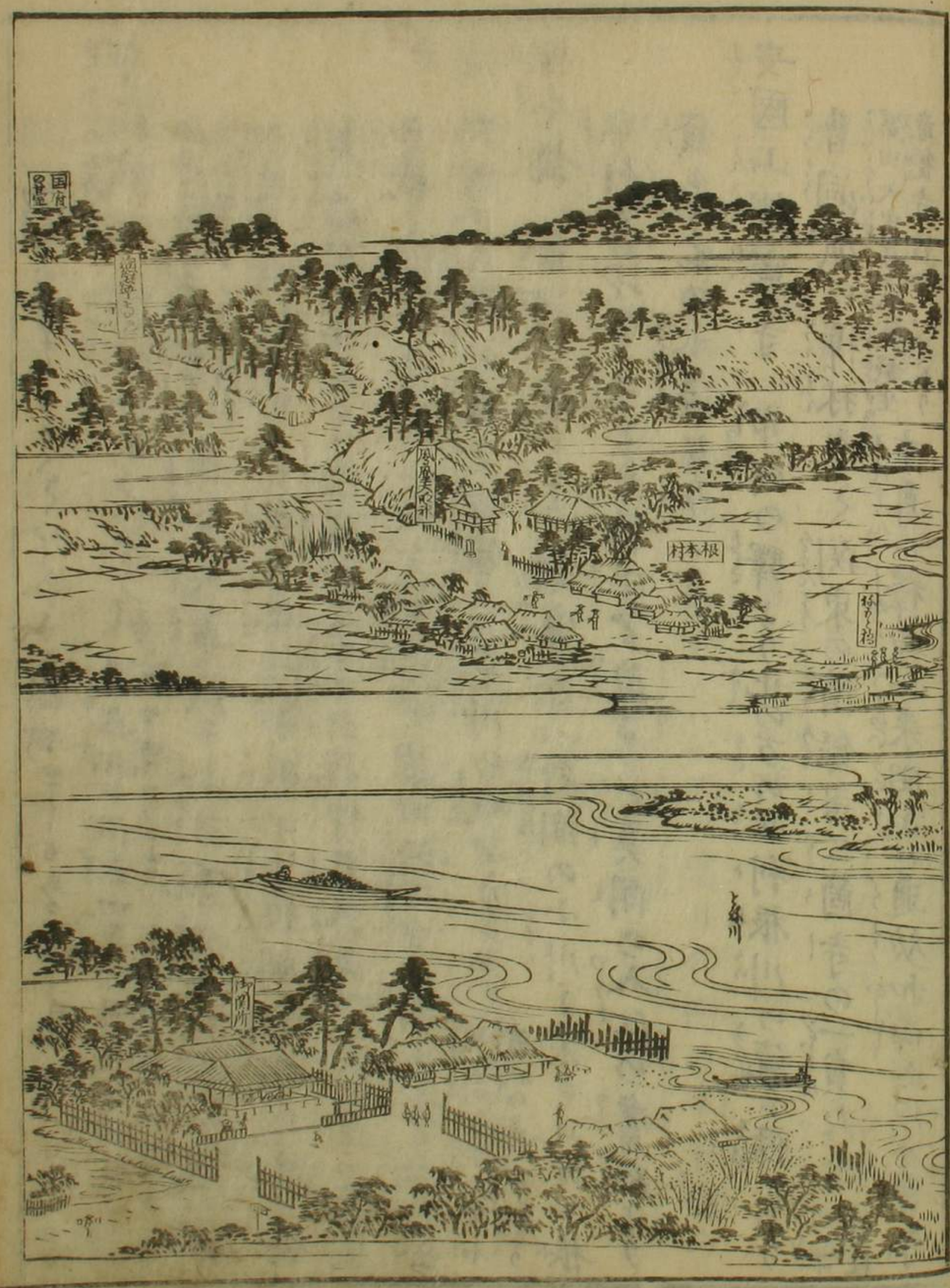
芳雲集　利根川帰帆　実陰
雲はらくとまれるそのうきわかに霧を分ぬと帰り行ふね人

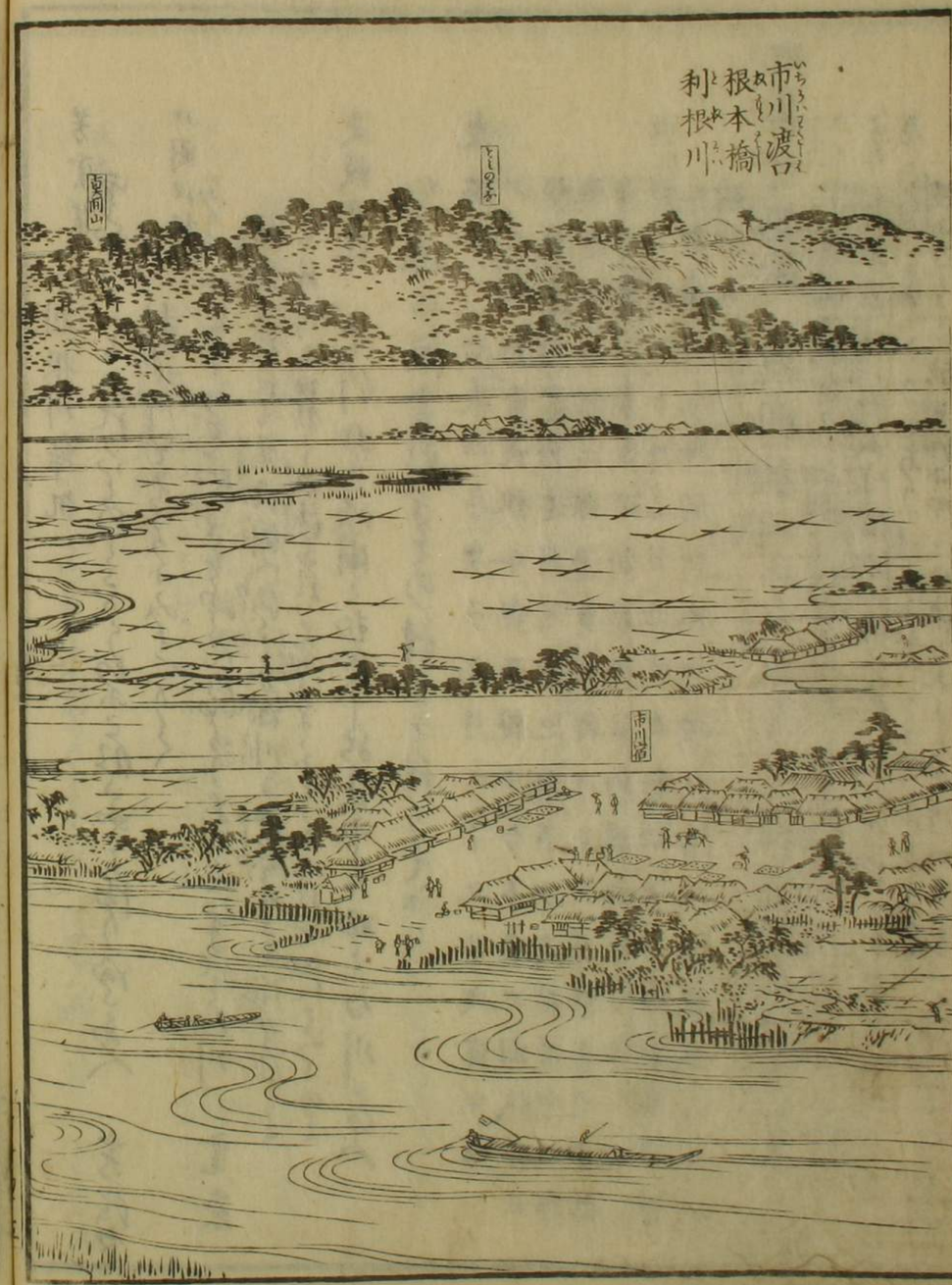
北国紀行
利根川をわたりてよみける　堯恵
ふりつもし雪のきえやらぬみ山より流るるぬまひと刀祢川
此歌ハ何れも常陸国へ流る刀祢川に讀合せられたる歌なれとも
その川も坂東の水流なれバ其地に於てこれを加へたるのみ

更級日記　下川ゆきて国とむさしの境になる川とよみ
かみの瀬まつさとの津にとまりて云々

東鑑曰 治承四年庚子九月二十九日戊寅 中略
江戸太郎重長依令与景親于今不参之間試昨日
雖被遣御書猶追討可宜之趣有沙汰被遣中四郎
惟重於葛西三郎清重之許可見太井要害之由偽
而令誘引重長可討進之旨所被仰也 下略
又
曰 同年十月二日辛巳武衛相乗于常胤廣常等
之舟 済太井隅田両河精兵及三萬餘騎赴武蔵
國云々

迦羅鳴起瀬 新利根川の水流なりといへとも今其地さだかならず
土人云く柴俣の辺なりと 小条五代記に氏康と里見義弘戦ひの条下に武州江戸
より小田原方遠山丹波守富永三郎左衛門尉を在番しかるめきの川を前に
あてかくそこかくさりとありはしもかへかるさの瀬ともあり
接するにしれ日記にかるさの瀬とあるは此川のすなはちんを名あらくハ後世


国府
根本村


市川渡
根本橋
利根川
市川

里俗あやまりてくゝくかゆめきと称唱せしもあるへからす

市河城址 其地今定かならず 義経記云治承四年九月十一日武蔵と下総の境なるまつとの庄市河といふ所に着 とあり昔ハ松戸を庄と唱へしと知ゆ 鎌倉大草紙に上杉憲忠より今度中務入道了心の子息實胤自胤二人を取立下總國市川の城に楯籠康正二年正月南圖書築田出羽守其外大勢指遣し數度合戰して同十九日終に城を責落も築田河内守ハ関宿より打て出武州足立郡を過半押領し市川の城をとると云々 猶前の弟六巻石濱城の条下に詳なり

根本橋 市河の渡口より總寧寺へ行間の小川に架を此地を根本村といふより号とも橋下を流るゝハ真間の入江の舊跡より發するの水流なり

安國山總寧寺 市河の驛より北の方の丘利根川の流に傍てあり 曹洞派の禪林にして関東の僧録司三箇寺の一員たり 所謂常陸冨田大中寺武蔵越生竜穏寺當寺ハ是なり 本尊ハ釋迦如来開山ハ通幼和尚といふ當寺往古ハ近江國にあり天正三年乙亥北條氏政當國関宿に地に移されしと屢洪水の患あるにより寛文中竟に此地に引とあり惣門の内右に鹽竈六社明神の社あり陸奥の摸なりといふ大田道灌手植槙と称するハ大門の通り列樹の中下馬の石碑に相對して右の傍にあり又客殿の脇に梅の老樹あり是も道灌親栽る所とぞ 當寺より綜師道正庵の解毒丸を出せり

國府臺 總寧寺の辺より真間の辺迄の岡をすべてかく称せるなるべし 北条五代記に云古き文にハ國府臺に脊代鴻臺とも書とあり今所の者ハ高野臺と書ものもありとあり 按に鴻臺ハ武州栗橋の西にありて此地を云にあらず和名類聚抄に下総乃國府ハ葛飾郡にありと記せり依考ふるに國府の近き辺にある所の丘山なれハ國府臺といふ号たりしなるべし 或人云下総國葛飾の府ハ往古葛西の地を本府とせしなるべく葛西昔ハ下総に属せり永正六年の宗長か記行東土産に下総國葛西の府のうちを半日ばかりも過しをとあるき今井の津浄土門なりける浄興寺に立寄てとあり證とすへし按に前の新利根川の条下に挙たり清輔奥義抄の文によるに葛飾郡ハ大郡なれハ利根川と國府を中央に定めて以東を葛東と呼ひ以西を

仏殿
方丈
禪堂
山門

國府臺
總寧寺
裏門

其二
古戰場

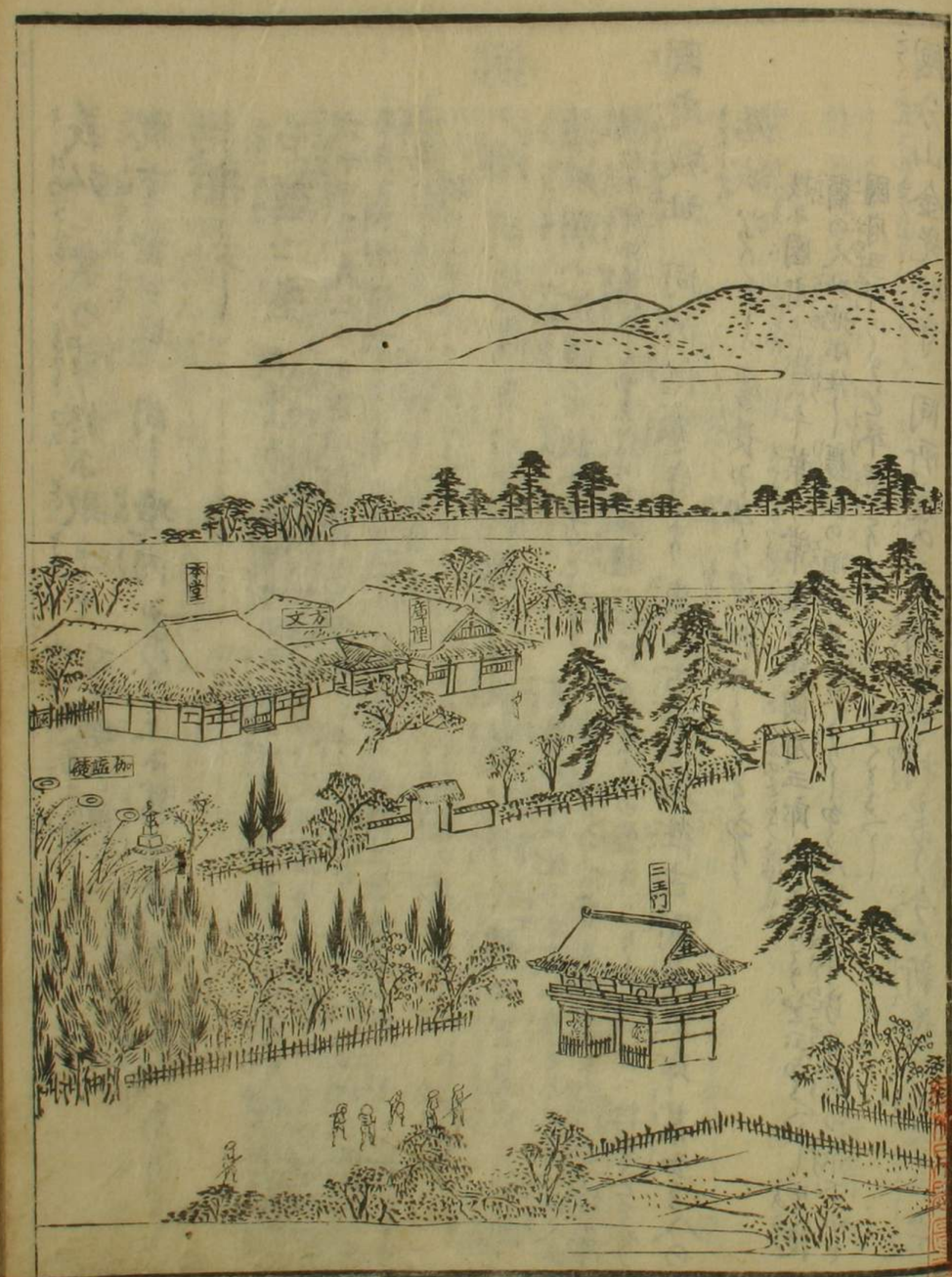
葛西とハ唱へしかされとゝ利根川を隔りとし葛西の辺ことゝく武蔵國へ加へたまふ故とハなりしあり

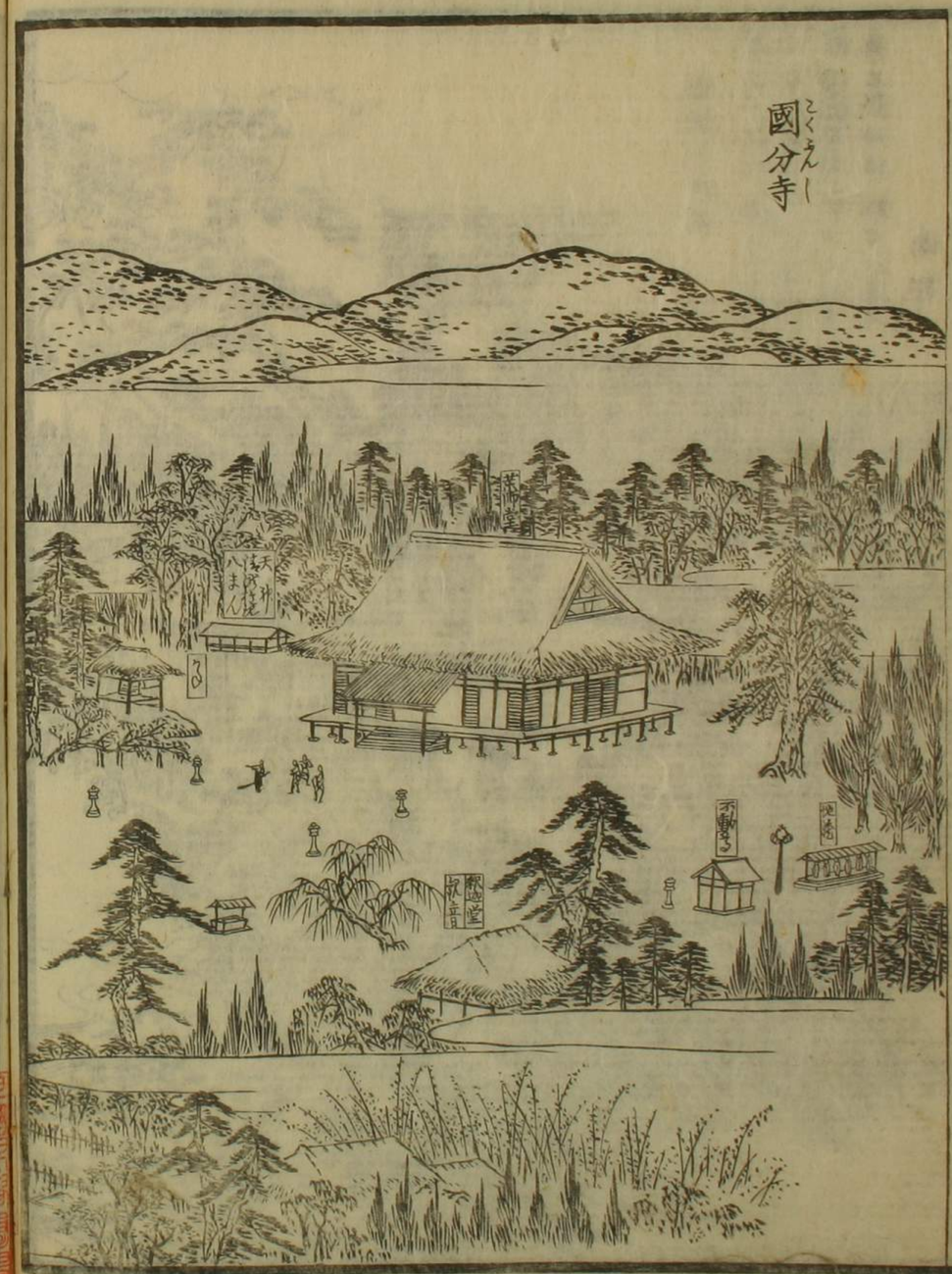
國府臺古戰場　總寧寺の境内をゝく其舊跡なり文明十一年七月北總の一揆臼井の城ゝ楷籠りゝる頃太田持資兵を発して此地ゝ陣城を取立件の一揆を攻落しゝる程の究竟乃要害なりゝれハ天文六年ゝも或いハ小弓七年生実御所足利左兵衛佐義明兵を起し小田原を攻んとしいまゝ事なゝきゝゝゝ洩て其聞ありゝれハ同年十月曽北条氏綱及ひ氏康小田原を進發し同五日鴻の臺の陣を責る戦ひ利ゝく義明父子并舎弟基頼共ゝ討死也又永禄七年ゝハ大田新六郎兄弟の輩小田原ゝ賀き同苗美濃守資正入道三樂斎及ひ里見安房守義弘等と此地ゝ屯しゝれハ小田原より討手として遠山丹波守同隼人佐をむかハしむ故ゝ太田兄弟相図相違して武州岩附へ落行々り然ゝ北条氏康父子小田原より馳向ひ同年正月七日八日大ゝ戦ゝ依く

總寧寺
羅漢井

總寧寺晩眺
荒城千仞没 蕭寺上方閒
山斷江帆出 跨廻郊樹來
磬鐘餘鹿野 戰代古鴻臺
落日斯時恨 臨風起客哀
南郭

國府臺の斷岸之圖


本堂
文殊
薬師堂
仏蓮華
三王門


國分寺

義弘三樂の輩終ゝ敗走せ　諸書に載る所の要を摘む

殿守臺旧址　同し境内にあり上に冨士浅間の小祠あり

白檀多し

石櫃二座　同所にあり寺僧云古墳二双の中北にあるものを里見越前守忠弘の息男同姓長九郎弘次と云人の墓なりしに一ツは其主詳なれども或云里見義弘の舎弟正木内膳の石櫃なりと中古土崩れしとて今は石櫃の形地上に露はる其頃櫃中より甲冑太刀の類金銀の矣陣太鼓其余土偶人等を得たりとそ今其一を存して德寧寺に收藏せり櫃に上世の人の墓なるへし里見長九郎及正木内膳の墓とそは何れも誤なるへし

鐘ヶ淵　同所断岸の下利根川の水流を号く傳云里見氏乃陣鐘此淵に沈没せ故に号とすと其鐘今も此地の水底に存せとなり或人云鐘の水中に落入りしと此鐘は船橋慈雲寺の鐘なりしを此地へ持来りしなり

國府城址　同所徳寧寺より東の方をいへ往古國府五郎某なる人の居城なりしと慶長中迄なり沒収せしとあり

按に國府五郎は千葉介常胤の弟國府五郎胤道なりと云ふ後商の人此地に住し慶長の頃迄居られしなり同巻牛洗前宮の条下に國府五郎のことを挙置しなり

國分山金光明寺　同所東の方國分寺村にあり今は新義の真言宗わかく京師三宝院に屬せ本尊藥師如来の像は開山行基大士の作脇士の十二神将は運慶の彫像なり堂内髭頭盧尊者は當寺を行基大士の作なりとなり

聖武天皇の御願にて毎國に置る所の國分寺の一なり中興開山を宥天法印と号し本堂の額に金光明寺の四字を畫せしは智積院僧正運敞の筆なり

樓門　樓上に古佛釈迦を安置せ開創時世のことなれども希有なり

釋迦堂　本堂の右にあり本尊は丈六像天王の像は上古の物にして釋迦年尼佛の金像高一丈六尺者各一鋪を造り并大般若經各一部写さしむ云々

天皇普く天下を令して聖武天皇の御願なり其余古佛像多し續日本紀に云

小田原北條家制札一通　奥に子二月十四日遠山左衛門尉印を一通の末に名を記しとあり

古證文二通　二通とも天正十三年九月二日とあり

全回領國分郷と宛名を記しとあり

其文中に十二坊のことあり

古笈一　花押既に美を尽せり古色愛すべし銅物に奥州住

權大僧都觀學院慶長六年と彫てあり

延喜式主税式曰　下總國公廨各四十万束國分寺藥分料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束

鏡石

真間の弘法寺より國分寺へ行方の田畔石橋の傍小溝の中にあり土人云此石根地中に入り其際を考ず依要石とも号くるとなり

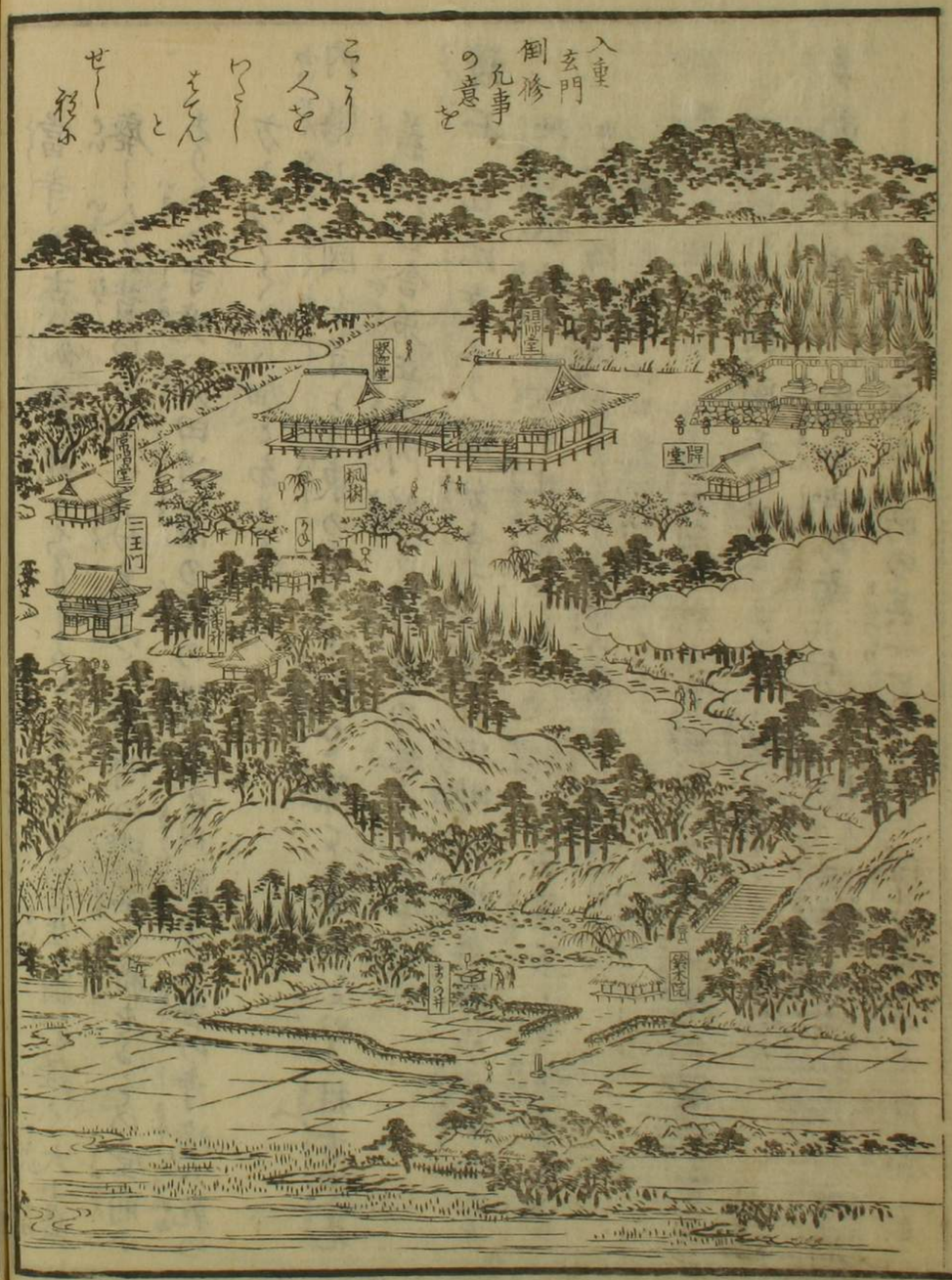
當寺往古は伽藍魏々たりしとも あるこの星霜を経て大に衰廃し今は昔の万一を存せるのみ當時の礎石と称せるこの堂前に あり今の寺境は大田道灌の頃の陣屋の旧跡ゆゑ古の寺境は乾の方少しのゆゑ今は畑となれり

内膳山　國分寺より東の方一丁計を隔てる丘をいふ往古里見義弘の舎弟正木内膳う陣営の地なりしとなり

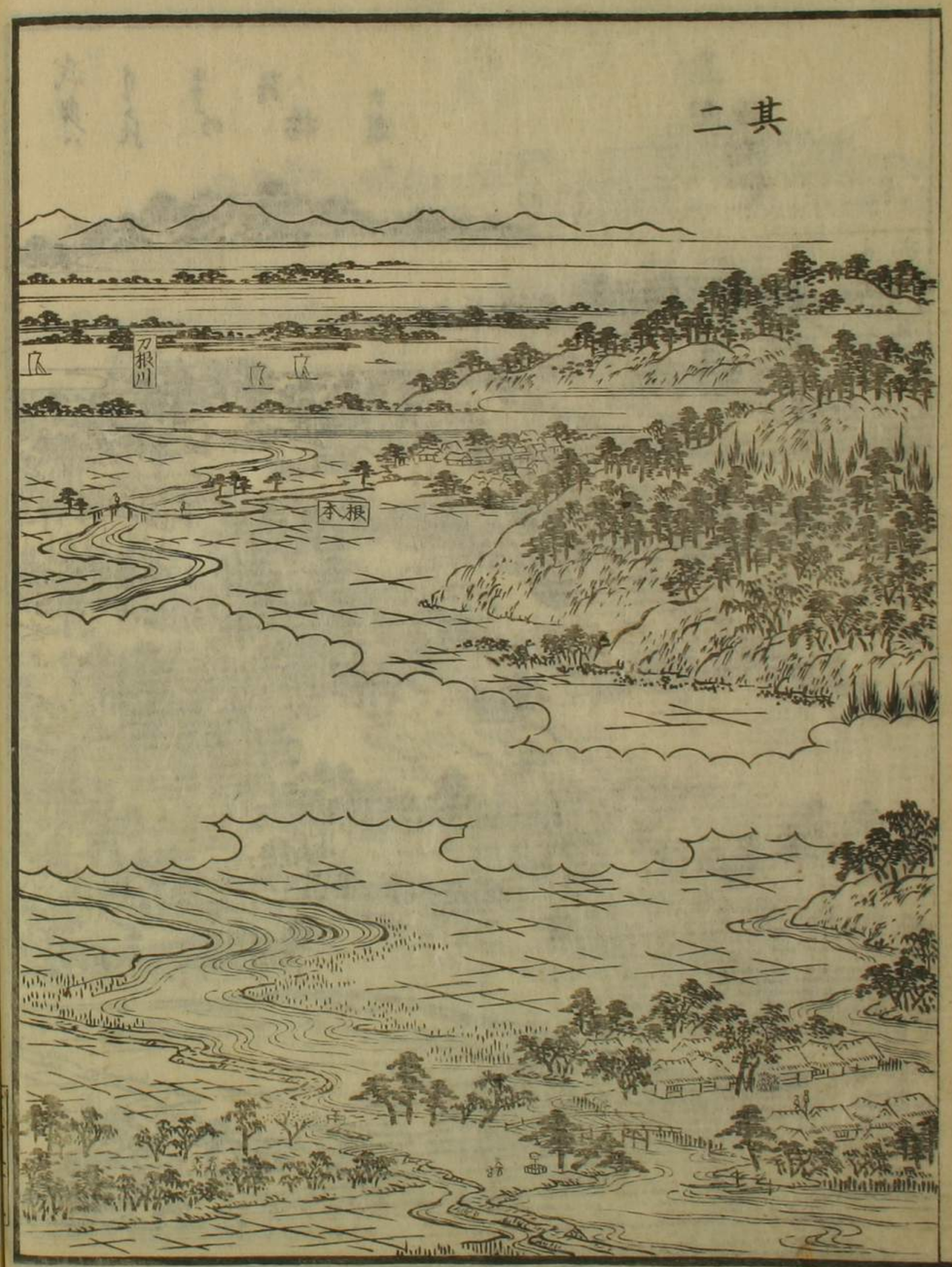
鏡石　弘法寺より國分寺へ行方の田畔石橋の際の水中にあり此石根地中に入る其際を考ず故に一に要石とも号くとなり土人此石橋は國府・鹿の甚堂よりあるこの石棺の蓋なる由云伝へ按ふに國分寺古伽藍の石材なるべし

持國坂　國分寺より真間へ行方の坂をいふ古へ此地に國分寺の四天王の内持國天の堂舎ありし故に号くとなり

真間山弘法寺　國分寺の南にあり市河村に属す日蓮大士弘法の地にして六門家と称する所の其一員なり日頂上人を以て開祖とせ


入重
玄門
御修
凡事
の意を
こゝろ
人を
つゝ
さゝん
と
せゝ
移ふ
祖師堂
鐘楼
楓樹
三王門

我身ハ
りゝ
まゝの
弛
格
日蓮
真間
弘法寺
方丈
本堂
庫裡
宝庫



其二

本國院日頂聖師ハ六老僧の中ゆて伊豫阿闍梨と称せ富木常忍の子なり文永四年
丁卯日蓮上人ゑ就く得度せ弘安五年壬午上足の第五とゐる日蓮上人の滅後守護所
を営み て本國院と号ゆ土人ハ山本坊と称せ正安元年己亥父常忍寂せの後京どつ
くゝく八月十二日ゑを生去り終ゑかへゝ依示寂の年月其終焉の地をもしよす
もしゝ寺院をのゝ日を本堂ゆて釋尊の像を安せ富木常忍嘗
て忌日とすと日蓮上人日頂師を祖師堂ハ其右ゑ並ゑ内ゑ宗祖上人の
造り當寺ゑ奉安せ日蓮上人日頂師を祖師堂ハ其右ゑ並ゑ内ゑ宗祖上人の
して點眼せゝ賀の素を賜ゝ
像を置此像ハ日法上人の作なり支院十餘宇各磴道ゝ下に
列せ大門ハ松の列樹ゆゝく六丁程あり
楓樹 歓迎堂の前ゑあり今ハ枯株となりゝ其形を存せるのみゝ ハ四五丈ゑ
あまりしとのり所謂真間の楓と称せるとの題なり
遍覽亭 古文の構のあゑあり 額ゑ遍覽亭と題せ黄檗千呆和尚の筆跡
なり此所ハ山崖ゑ臨みゑ西南を眺れゝ葛飾の村落眼下ゑあり
江戸の大城甲相の群山雲ゑ霞ゑ横ゝ又こゝゝゑハ房総の海水遠く開け
実ゑ千里の風光を貯へゝ
樓門 砌磴の上ゑ聳ゆ左右の金剛力士ハ仏工運慶の作なりと全躰黒色ゑ
他ゑ異なり 扉上ゑ掲る額ゑ真間山と題せ弘法大師の親筆なりと了
當寺往古ハ真言 瑜伽の古刹なりしゝ日蓮大士此地ゑ遊化の頃
寺僧大ゑ宗意を論し竟ゑ大士の化導ゑ帰依し宗風を改
轉せるとゝり 或人云西新井邑総持寺ゑ安せゝ弘法大師の灵像ハ
當寺改宗の頃かゝこゝゑ迁しまゐせしと云日統抄日了性

真間の弘法寺に住せる或日日常と問答を試み日常衆徒を化す寺因て本化の道場と云又先徳記を考ふに関東河田谷天台宗の中ふ了性と云あり本文ハ宗祖上人と問答せし住侶の名を注せるなり
くるを此了性なるべし

當寺 什宝多きう中ハ宗祖上人及ひ諸徒の真筆の
曼荼羅消息の類ひ数通あり悉く挙ハ不遑毎歳九月
九日より十八日迄法華経千部讀誦十月十三日ハ宗祖上人の
忌日たるより御影供を修行せり近在の道俗群参せ

真間浦 同弘法寺の前の水田の地をいふ勝鹿の浦といふを
此所のことを云なり 昔ハ真間の崖下まで浪打寄たりと土人云
故ハ此辺ハ今も其田跡と字ハ残れる
所謂大洲ハ初て洲ハ立野ハ芦を刈りて陸地なりし所なり芦畔とのみ萱野ハ水田を開発せ

万葉集
可豆思加之麻萬能宇良未乎許具布禰能布奈
妣等佐和久奈美多都良思母
夫木抄
かつしかの浦の沖の波の白玉

俊頼

かつしかの浦の沖の波の白玉をあしの葉にもつけてみるかな

道隆

真間濱 地名 あらをいつくし

夫木抄
汀なる芦の志をれ葉吹き波の白玉 為家

真間入江 是も同し辺なれとも今ハ耕田となり又ハ民家林
藪ふ沾革して古ふ違へり

万葉集
勝牡鹿乃真々乃入江爾打靡玉藻苅兼手兒名
志所念

山邊宿禰赤人作

續十載
夫木抄
たれかまの入江の秋の秋晴 為教

真間於須比 仙覚律師の萬葉集抄云於須比ハとひとはとひといふ義なりと又契沖阿闍梨の万葉代匠記ハ駿河能宇美
於思敝爾とあるを本居宣長翁の考へ手古奈の磯辺ありとの意ありんとあるを磯辺とのみ考へられ
ありしハ浪さへ寄てさきしとの意ありんとあるを磯辺とのみ考へられ

光俊

万葉集
可豆思賀能麻萬能手兒奈家安里之可婆麻未
乃於須比爾奈美毛登杼呂爾

真間の継橋

弘法寺の大門石階の下南の方の小川ゝ架せる所乃
ゝゝ川の橋の中なる小橋をさしていふ
いふありとさもあらばあらばや
或人いふ古へハ両岸より校をもて中梁をなく打ちけゝる故ゝ継橋ハ

万葉集
安能於登世受由可牟古馬母我可都思加乃麻
未乃都藝波志夜麻受可欲波牟

新勅撰
彷徨や昔のまゝ残橋をけぶすゝきの穂 慈円

風雅集
昔百ゝ越ぬ波ハかゝ川ゝやゝ真間の継橋 雅経

同
かつしかまの浦風吹ふるゝ夕波越るよとれつきそし 朝村
按ゝ朝村の和歌ゝ山城の淀とハ見えあり
入重玄門倒修凡事の意を
こゝふ人を深しそんとせゝ極ふ乗多きことのまゝ残橋 日蓮

真間の手児名舊蹟

同所継橋より東の方百歩ばかりあり手児名ゝ墓の跡なりとゝ後世祠を営ゝこれを奉ゝ手児名明神と号ス婦人安産を祷り小児疱瘡を患ゝる類ひ立願して其奇特を得と祭日ハ九月九日なり
霊告ありてこゝハ崇めまつり春臺文集継橋記ゝ手児名のゝを載せりとゝ
其説里諺ゝ証とゝふ足らず
清輔奥儀抄云 是ハ昔下総國勝鹿真間野の井ゝ水汲下女なりあさゝき麻衣を着てこゝ水を汲其容貌妙ゝ貴女ハ千倍せり望月のゝく花の咲ゝめくゝ立ゝを見ゝ人ゝ相競ふゝ夏の虫の火ゝ入ゝ如く湊入の船のゝくなりこゝゝ女思ひあゝゝ一生ゝくゝ存しく其身を湊ゝ投中略
又かゝしゝ死ぬのてゝかともよゝり真間乃入江真間北継橋真間の浦真間井真間の野なとゝあゝこれ世ゝ
云ゝ

過勝鹿眞間娘子墓時作歌　山部宿禰赤人

古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻
問為家武勝牡鹿乃眞間之手兒名之奥擥乎此
間登波聞杼眞木葉哉茂有良武松之根也遠久
寸言耳毛名耳毛吾者不所忘

反歌

吾毛見都人爾毛將告勝牡鹿之間能手兒名
之奥津城處

詠勝鹿眞間娘子歌　高橋連蟲麻呂

鶏鳴吾妻乃國爾古昔有家留事登至今不絶
言來勝牡鹿乃眞間乃手兒奈我麻衣爾青衿着
直佐麻乎裳者織服而髪谷母撥者不梳屐乎谷
不看雖行錦綾之中丹裹有齋兒毛妹爾將及哉
望月之満有面輪二如花咲而立有者夏蟲乃入
火之如水門入爾舟已具如歸香具禮人乃言時
幾時毛不生物乎何為跡歟身乎田名知而浪音
乃驟湊之奥津城爾妹之臥勢流遠代爾有家類
事乎昨日霜將見我其登毛所念可聞

反歌

勝牡鹿之眞間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

下總國相聞往来歌　作者未詳

可都思可能麻末能手兒奈乎麻許登可聞和禮
爾余須等布麻末乃氏胡奈乎

真間の井　同所北の山際鈴木院とのゝ草庵の傍ゝあり手兒奈ゝ
汲ゝる井ゝと云傳ゝ中古此井より靈亀出現せゝ故に亀井

梨園

真間より八幡へ行道の間よあり二月ろ花盛ハ雪を欺よ似くり李太白の詩ハ梨花白雪香と賦しくるも諾なり

ともいふとなり

此鈴木院ハ北条家の臣ハ俗称と鈴木修理と云ハ鈴木と号ハ又此庵の傍よ其祖先鈴木近江守ハ石塔あり

此人の造立故ハ

これも同修理と云人造立せり

按ハ寛文八年戊申相州鎌倉鶴ヶ岡修造の時の工匠を鈴木修理長常と然時ハ番匠の家なる人歟崔ヶ岡絵牒ハ載れも又別の人ハや猶考べし

万葉集

勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒名之所思

光明寺入道摂政

葛飾八幡宮　真間より一里あまり東の方八幡村よあり

常陸ハ房総の海道ハ

驛なり鳥居ハ別當ハ天台宗ハ八幡山法禅寺と号ハ本地堂道ハ阿弥陀如来を安置一二王門ハ表の左右ハ金剛密迹乃像裏ハ多聞大黒の二天を置り神前右の脇ハ銀杏の大樹あり神木とす

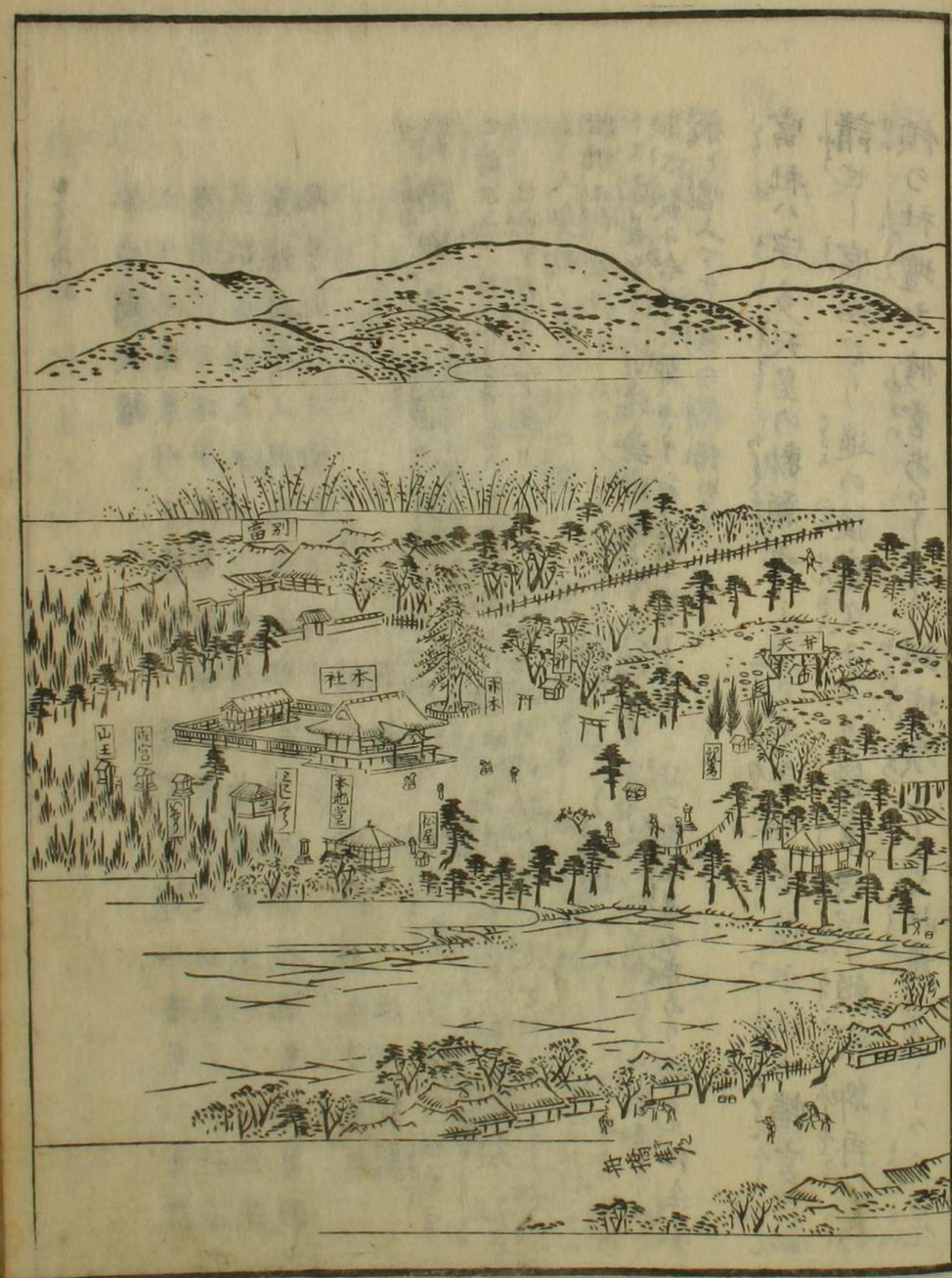
此樹のうろの中ハ常ハ小蛇棲り毎年八月十五日祭礼の時音楽を奏せ其時数万の小蛇杖上ハ顕れ出つ衆人是を見て奇なりとし其丈三尺七寸あり竜頭の

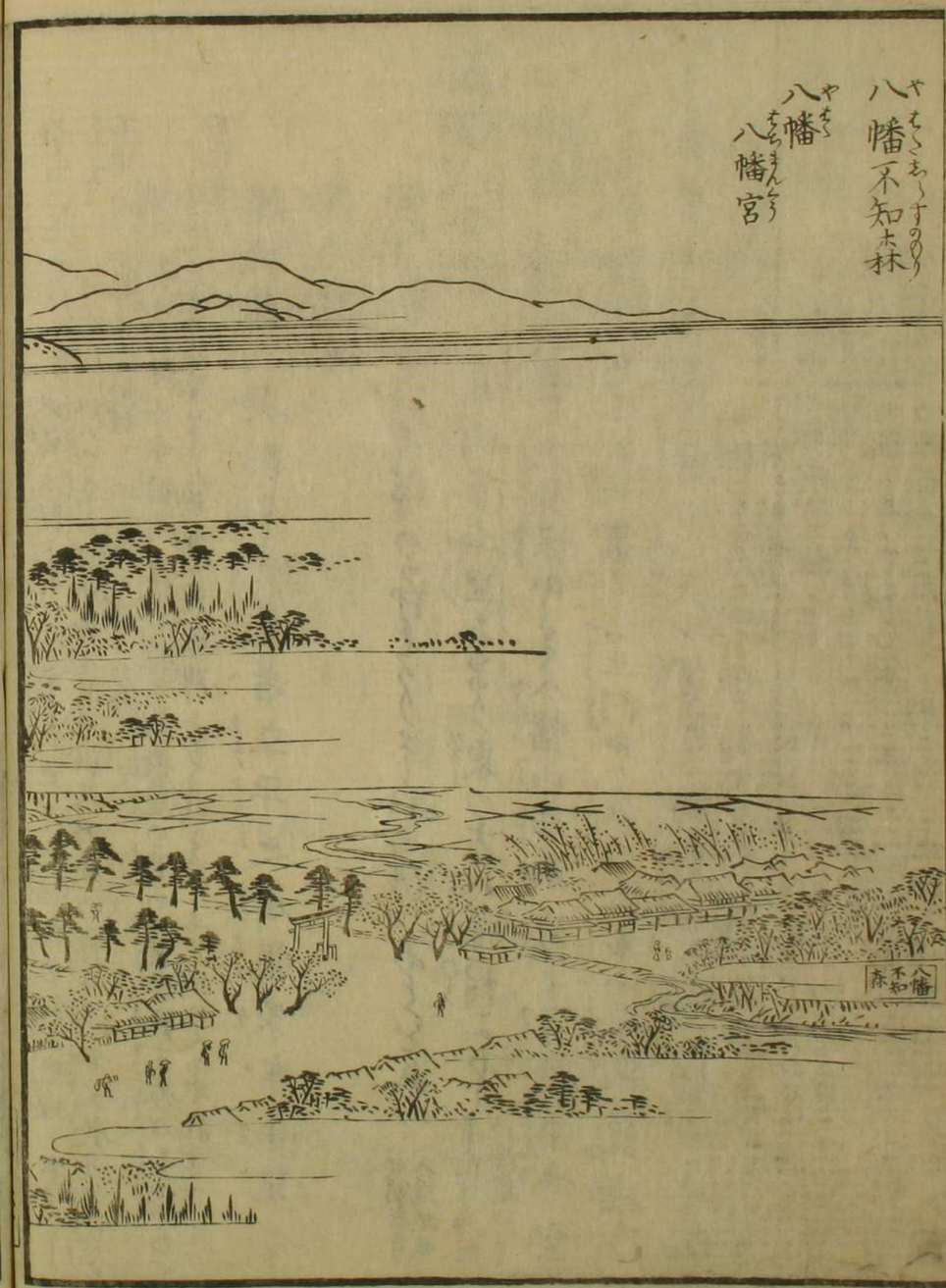
古鐘一口　寛政年間拈木の根を穿て是を造る

側ハ應永二十一年壬三月廿一日と彫付てあり

按ハ應永ハ鐘の銘ハ応永の元亨元年より八九十有余年後の年号なり

應永の乱世を恐れて土中へ埋めて時其年号月日を刻


別當
本社
天神
山王
本地堂
中禅寺


八幡不知森
八幡
八幡宮
八幡不知森

奉冶鑄銅鐘

大日本國東州下總第一鎮守葛飾八幡是大菩薩
傳聞寛平宇多天皇勅願社壇建久以来右大將軍
崇敬殊勝天長地久前横巨海後連遠村京虫性動
鳧鐘曉聲人戰眠覚金啓夜響永除煩悩能證菩提

元亨元年辛酉十二月十七日　願主右衛門尉丸子眞吉
法印智圓

別當

筒粥神事

毎歳正月十五日の朝此神事あり其年の豊凶を卜す

放生會

八月十五日に修行す此日神輿渡せらるる

又同日津宮といふ所あり夕七時頃當社の社人集り華表の前に擂の杵長き柱に白布を巻き建上の方に其白布を結ひ合せ杵に足をかけ代る代る念願ある人身柱に登り件の擂の上へ登り四方を拜し社の方を拜し孫に下る此行ハ相州日向菜所にもありく推登と云ふ其趣相似たり又其津宮社の下に樂屋をまうけ狮子猿大鳥の形を拵ひ此樂屋より出て生姜の市あり故に土俗生姜祭と唱ふマチハ祭の縮語なり

當社ハ宇多天皇の勅願にして寛平年間石清水正八幡宮を勸請せし宮居なり遥の後建久に至り鎌倉將軍頼朝卿再び朽傾の社壇を修營あるより封域廣くして壯麗なり又星霜を歴て今ハ老樹鬱蒼として上久しく玉垣となる

按に當社ハ國分寺に同じく一國一宮の八幡宮なり往古府中に置れしの題なるべし

八幡不知森　同所街道の右に傍て一ツの深林あり方二十歩ばかりす往古八幡宮鎮座の地なりと云傳ふ即森の中に石の小祠あり里老云人謬て此中に入時ハ必神の祟ありと是を禁む故に垣を繞らしてあり或云平親王將門平貞盛の矢に秀郷に討れ後六人の近臣と称する軍將首級を墓ひ此地に至りし頃此森の中に入て働を終に土偶人と頭れ云しと其後雷雨に破壞せしより此地を距ること遠ハ必たりとて大に驚怖し又或人此森の田帶ハ八幡の地に入て森の地ハ八幡の地に行德の持分なりと此故に八幡村の中に入會とすれども他の村の地なるに八幡ハ字せしと云ふ

因に按に八幡ハ莊の号あり中山什室の内應永二十七年千葉介康胤の證文に下総國八幡庄本妙寺法華寺弘法寺三ヶ所寺務職云々同庄曽谷郷田畠在家云々の如く記せり證とすべしあれハ眞間のあなたの曽谷

曽谷妙見尊　曽谷村長谷山安國寺に安置せり當國千葉寺妙見尊と同木にして其末木を以て彫刻せりと云ふ當寺境内に王義之宮あり華表の額に晉王公廟とあり烏石葛辰の宮あり

傍に石碑を建つ何の謂れなるやを知らず

高石明神社 八幡より東の方佐倉街道亀越村深町の入口道より左の岡にあり別當ハ日蓮宗にて泰福寺と号す祭礼ハ九月九日なり土人傳云當社ハ里見安房守義弘の弟南總大多木城主正木内膳亮時総の墳墓なりといへり（正木内膳の事諸説あれども繁を厭ひてここに略せり）神體ハ剣を帯せし馬上軍神の像なりといふ（永享二年平胤貞より中山の中興日祐上人へ注進の状に八幡庄内なる高石神村の地を寄附せるとあり又同年二月同胤貞日祐上人へ附せる證文にハ下総國八幡庄高石神南方中島内坪付のことあり依て考ふれハ高石神村の名古きことしられたり）

安房須明神社 同所中山の北池田といふより北の岡にあり傳云里見越前守忠弘の息男里見長九郎弘次の墓なりといへり今淡島明神と云 今猶塚の形を存せり

北条五代記に里見長九郎弘次生年十五歳初陣なりしが桃花馬に乗母衣をかけ弓を持てたゞ一騎すゝむ所に落合を相模國の住人松田左京亮康吉追かけ組て落とし既に首を取むとせしが容貌美麗にして花のやさしき少年なりしかハたすけんと思ひしかと味方雲霞のごとく走来り首をうばひとらんとせしかハ力およばす首討落しけれとさすがにたけき康吉も涙にくれて前後に迷ふばかりなりしが目にあまる程弓箭に携る故なりと発心して帰國に及びて出家して浮世と改名し一筋に弘次の跡をとふらふと云く

葛飾志云中昔かつしかの浦に塩賣をのとあり或時此所を通りしに道端に古き髑髏の薄蕈に貫かれたるありしを何の心もなくて除かりしに其夜先に忽然として一人の壮子現出し其形容の男子はむかひ従つる此のちしてのち年頃蓮の根に貫きたるを謝せん若に此時なりしか今幸に逢を謝す是を以ちまかりし此若をもぬくる恩を謝せんとちらに西なしたる吾ハ本國ハ安房國なり其所縁今猶存せり吾か為にひとつ来るべしとて塩賣をのとをいざなひ須更にて房州に至り彼壮子か所縁の家に至る此時既に七月盂蘭盆會にて家内は亀棚を飾り壮子塩賣のをのこをしくて棚の下に居らしめ牌前に供せる所の種々皆ことくく此をのこに与ふ故に飢に臨む事なし然るにある日家の内おくそひのもの来りて互にさゝやきあへり依て棚の下よりうかゞひ見るに件の壮子あるしをとて親のとうちるをいかり罵詈又其家の稚児を囲炉裡の中へ蹴おとしぬ父母おどろき悲むる限なし塩賣のをのことて何故に稚児をかくるはさけなくおもとのせしと問ふに壮子答へて云く吾ハ此家の祖なるをとして此家に来れり然れとあるしのとて私しのおろそかなるを憎のあまりかくのことしと云く其後塩賣のをのこ家に帰らんとするを乞ひ則ちかしつ叔前のごとく須臾にして古郷に帰りぬこれハ不測の思ひをなし此地を封しおく件の髑髏を小倉に葬り本國安房國の安房須明神と称へしとなやこれ安房國の里見長九郎弘次か髑髏なりしとて津と須と音の通ふ故に今ハ安房須明神と称しけりと云く按に葛飾志に載る所浮説妖妄に似たれとも云傳ふるにまかせてしばらくこれを記しかゝるのみ

正中山本妙法華経寺 船橋街道の左側にあり 此地を中山村といふ 日蓮大士最初轉法輪の道場にして一本寺なり開山ハ日常上人

中興ハ日祐尊師なり 鎌倉大草紙に云千葉介貞胤父の宗胤三井寺にて討死せし後此國落迄ハ宮方にて新田義貞の扈供たりしかと
ころ弟に胤ある氏の味方にありし弟胤貞ハ宮方にて千葉にありけるか此人の子は日祐上人なり
法花の学匠にて下総國中山の法花経寺の中興開山なり是に依て胤貞より中山の七
堂建立ありて五重の塔婆をも建らる其後胤貞上洛して吉野へ参り西征将軍の宮の
御下向の時御供して九州へ下り大隅守に補任し肥前國を知行しけり日祐上人も
九州に下向し肥前國松王山を建立して総州の中山を引末代迄此所を中山と両山
一寺と号せり

祖師堂 日蓮上人の像を安せり 日法師の作なりと云 額 祖師堂 太虚庵光悦筆

祈祷堂 同所後の方にあり 額 祈祷堂 筆者不知

法華堂 同左の方にあり大士手刻の一尊四菩薩の像を安置せり此所ハ大田乗明の宅地なり乗明日常上人の教を受自の宅地を転して仏宇となし正中山本妙寺と号せり則此堂ハ其頃営建ありし所の侭にて世俗云飛騨匠の作なりと云なりと当時宗祖大士最初転法輪法華説法の道場なり 額 光明法花経寺 光悦筆 堂内外陣の家帯に掲く此堂の軒に宗祖大士より常忍へ贈られし所の消息の写しを板に書て掲く其文に云く

銭四貫をもちて一閻浮提第一の法華堂造りたりと霊山浄土にまいりあひ候ハん時申あけさせ給ふへし

十月廿二日　日蓮判

進上 富木入道殿

真書ハ宝庫に収む世に銭四貫とて造ると云傳ふるもの是なり

鬼子母神堂 同左に並ぶ此鬼子母神堂ハ鎌倉の某の堂なりしを移せりといふ本尊鬼子母神の像ハ宗祖大士の作にして往古大士常忍建立せ

法華堂に在せし頃一尊四菩薩の像と共に彫刻ありしと 祖師堂の前なり毎月十七日の夜遊在より道俗来詣す

経蔵 左の方にあり

竜渕橋 堂前の流に架せり

常唱堂 常唱堂の後に存す 真間弘法寺の開山日頂上人ハ日常上人の子なり久しく父の勘気を蒙り常に此寮舎にありて題目を唱へ

泣銀杏樹 故に此樹の下に幾回か来りて哭てを帰られし故に此号ありといひ傳ふ

五層塔 同し左にあり 釈迦多宝及び日蓮日慈の像を安せり日慈ハ当寺祖師堂創建の師なり当寺十八世

三十番神社 同後の方小高き所にあり当山の擁護神にして毎歳十一月八日火焚祭を修行す

宝庫 方丈書院の奥の方にあり宗祖大士の彫像其外仏経の類ひを蔵む

支院三十六宇 今破廃せしものありて僅に十六宇存せり

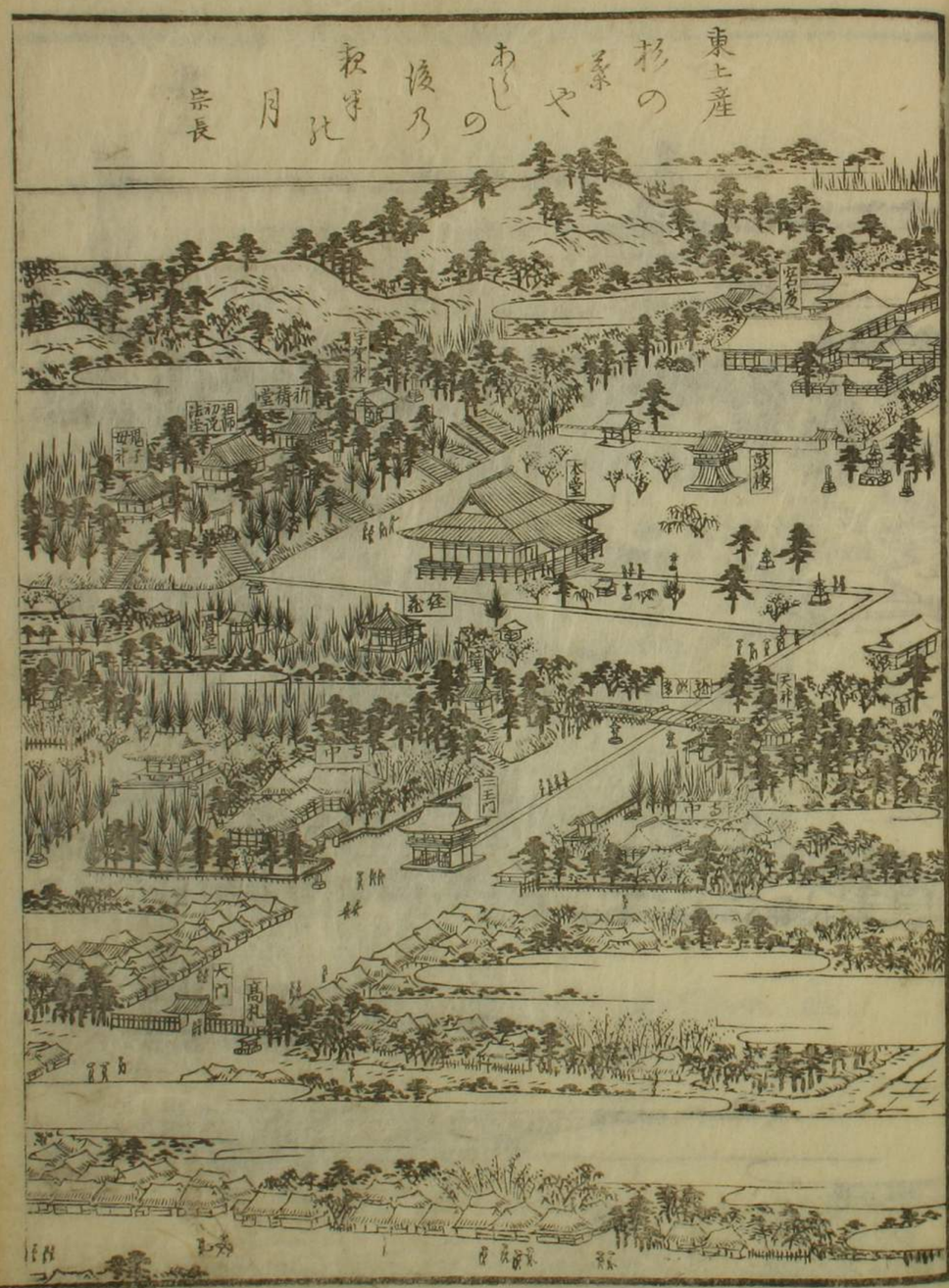
二王門 額 正中山 日等上人筆 或いふ光悦の筆なりと

中興開山日祐上人墓 総門より内左の方小路を入て二丁ばかり西の方山の中にあり当山第二世日高上人の墓も又此所にあり

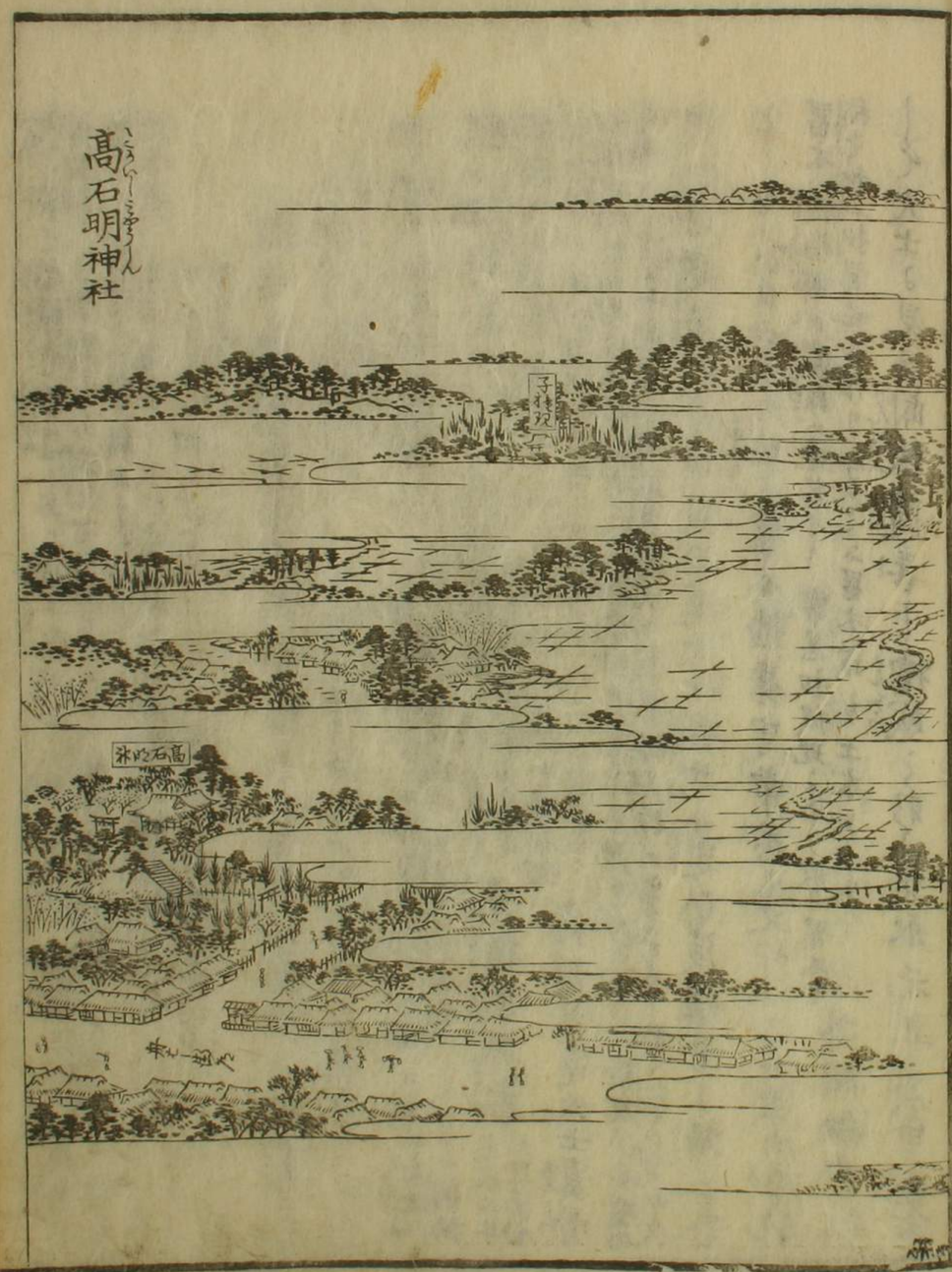
奥の院 方丈の構の外右の方の小路を入て三丁ばかり東北の方にあり文応元年宗祖大士此境にあそひ玉ひ富木常忍宅地に一宇をいとなみ法花堂と号け大士をしてこゝに居らしむ因て百日の間説法あり宗門最初転法輪の道場にして蓮山法花経寺の旧跡なり日蓮上人は小屋形の後にまそり百間ばかりの塚を築其中に納めし土をもさて堂を立つ聖人の法まうけにて立られたるとあるはこれをいふなり往古大士手刻の一尊四菩薩の霊像も此地に安置ありしとなり当寺第十二世の住侶日珖上人此地を封して法華一万部の経塚を築き古より宝蔵に安置せし日法上人の作の宗祖大士の影像をうつしまつるとなり

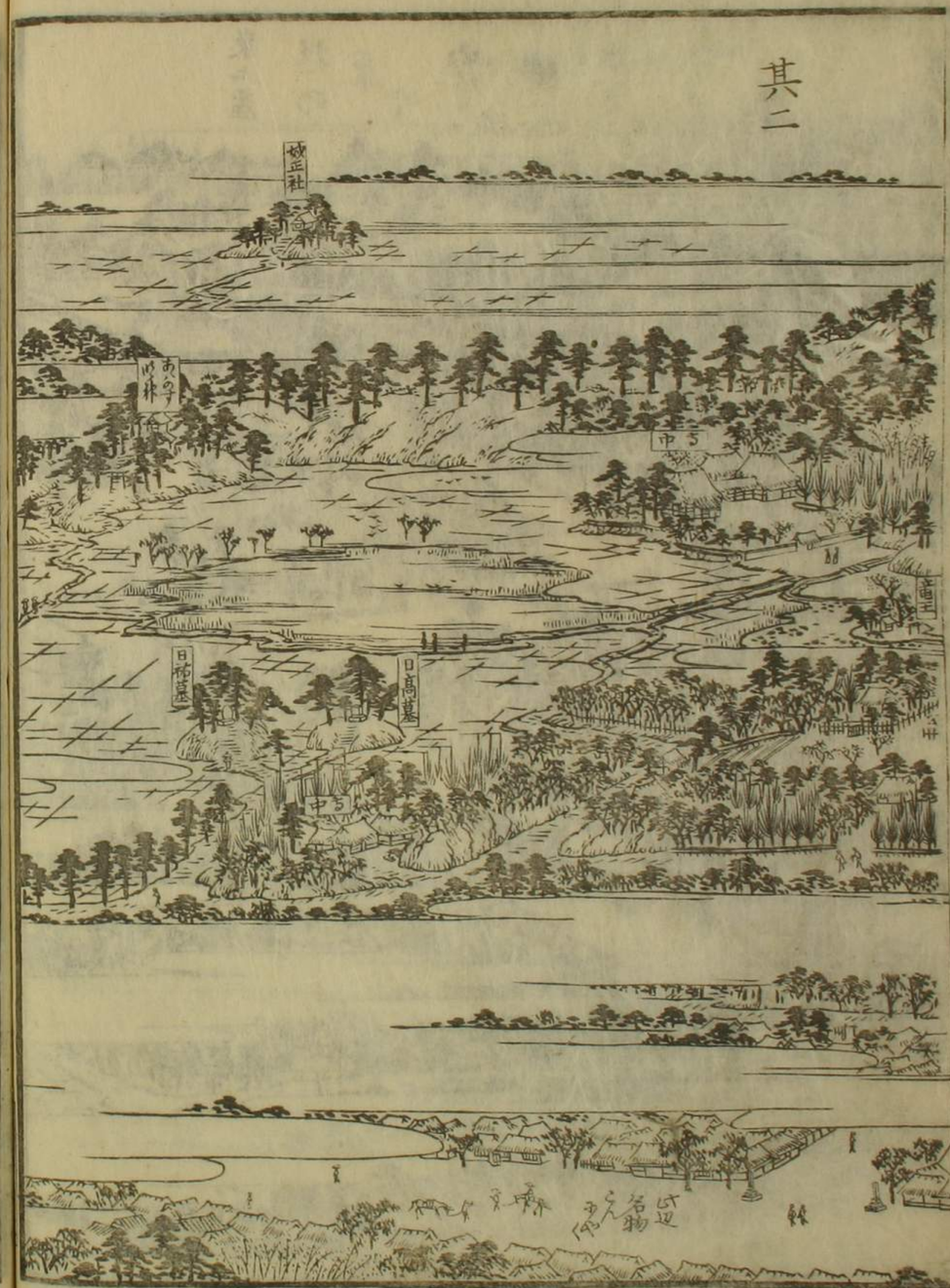
開山日常上人石塔 同所道を隔て左の方にあり石塔の上に草堂をいとなみ常忍修院と号に因幡國富城の産にして兼久二年庚辰を以て生る 本化信ハ冨木五郎

東上産
杉の
葉や
あしの
後乃
秋半
比月
宗長



妙法華経寺


高石明神社
高石の水


其二
日高墓
中ち

道と長て播磨守常忍と名く淺下総國中山邑に移住し鎌倉に住む土民称して
冨木氏なり日蓮大士の法化をたゝせ大士の滅後竟に薙染して日常と改む
正安元年三月二十日八十歳にして化すとゝ法花堂本妙寺に一宿しく
東土産　まの浦しのゝ中山の法花堂本妙寺に一宿しく
あくるはゝ一折をとあり〜と書かもとをてゝ

たのまれぬ　あ〜〜　たのまれぬ　宗長

千夜あ〜〜のゆめ〜〜　ゆめ〜〜　ゆめ〜〜

かつ〜〜うの浦まのことゝ　ゝ

今日はことゝふもせぬく

寺寶　立正安國論

諸山に藏ふ所の四部洛の本國寺甲の身延山
あ〜〜ひふ當山と真間の弘法寺とふ巻して宗祖
大士の親筆なり　同来由　文永五年戊辰法鑒日頂のよあ〜〜と　稟權出界書　文永三年九月冨木
常忍台後了性と法義を論ず了性竟に屈伏を冨木氏　高祖日蓮大士真骨
書を奉して是を告同十月朔日の返書ゆく二十二通あり
宝塔に収む日忍師の添状あり其餘宗祖大士をしも諸師の曼荼羅及び其頃の
武持あ〜ひふ千葉家の消息寄附状の類霊佛灵神の像をむ多く悉く記せふ遑あ〜
寺記曰建長六年甲寅日蓮大士　総州に遊ひ後鎌倉に帰らむ
と〜あ〜の日中山の住人冨木播磨守常忍も又か〜こふ至らんと
冨木は因播國巨濃郡の地名なり常忍初彼地にあり故に冨木と　其間船中に
称せ和名抄曰城に作り今こゝふ冨木或も土木とす
〜て大士に見え聞法随喜し檀越とする文永元年庚申竟に

宅地を轉〜く一宇を營み大士をしてこゝふ居らしむ此時一百日
の間大ふ説法あり又大士自親一尊四菩薩の像を彫刻あり
かゝふ安置し法華堂と號けらる　中山記に云く宝庫に一尊四大士の木像二刻十軀あり其一は佛形其一は
菩薩形皆大士の手刻と云ふ此法華堂を本
大士最初説法輪の道場なり今奥の院と称す
たゞつと称す法名は法蓮日禮と唱ふ當國曾谷に住せ
後宅地をあくらく梵刹とし曾谷山法蓮寺と号く　秋本太郎兵衛　教信　教信姓は平氏次郎
白井の人なり子孫に至り其地に一宇を及ひ太田乘明等来く檀越を
創建して白井山秋本寺と号く　乘明は五郎左衛尉と称せ當國中山氏部少輔康連の子なり曾冨木氏の
なり　諭導　大士の宗化に帰し一子を投して出家せしむ日高上人是
淺中老僧日高尊師父乘明卒せるの後日蓮大士の命に應し
日常上人の教を受其家を改く精舍とし正中山本妙寺と號せ
今の正中山の地是なり　亦先の法華堂を合て一寺とし正中山本妙法華経寺
と号す則日常上人を開山と称し日高師を第二世とす然に佛
心院日珖師　當山十二世　台命によりく寺法を更めしより已降
京摂より輪番して當山の貫主とされを毎年三月十三日より同

十九日より至るの間法華経千部讀誦七月十五日相撲奥羽を十月十三日八日蓮大士の忌辰なるゆゑ大法會を設く近國の道俗群参しく大より賑へり

若宮八幡宮　奥の院の地より一丁ばかり東の方叢林の中にあり富木氏の鎮守の神なりとなり中山什物の内正和三年甲寅四月二十一日日高師より千葉介貞胤へ賜られし簡の文に云く所々堂宮田地等若宮御堂中山坊若宮別當職彼岸田谷中下畧云又同什物に正安三年日高師[illegible]に渡られし若宮持佛堂の本尊と称する首題の怒幅あり然れハ其頃ハ別當職を別に附し置く崇敬尤厚しと云れこそり

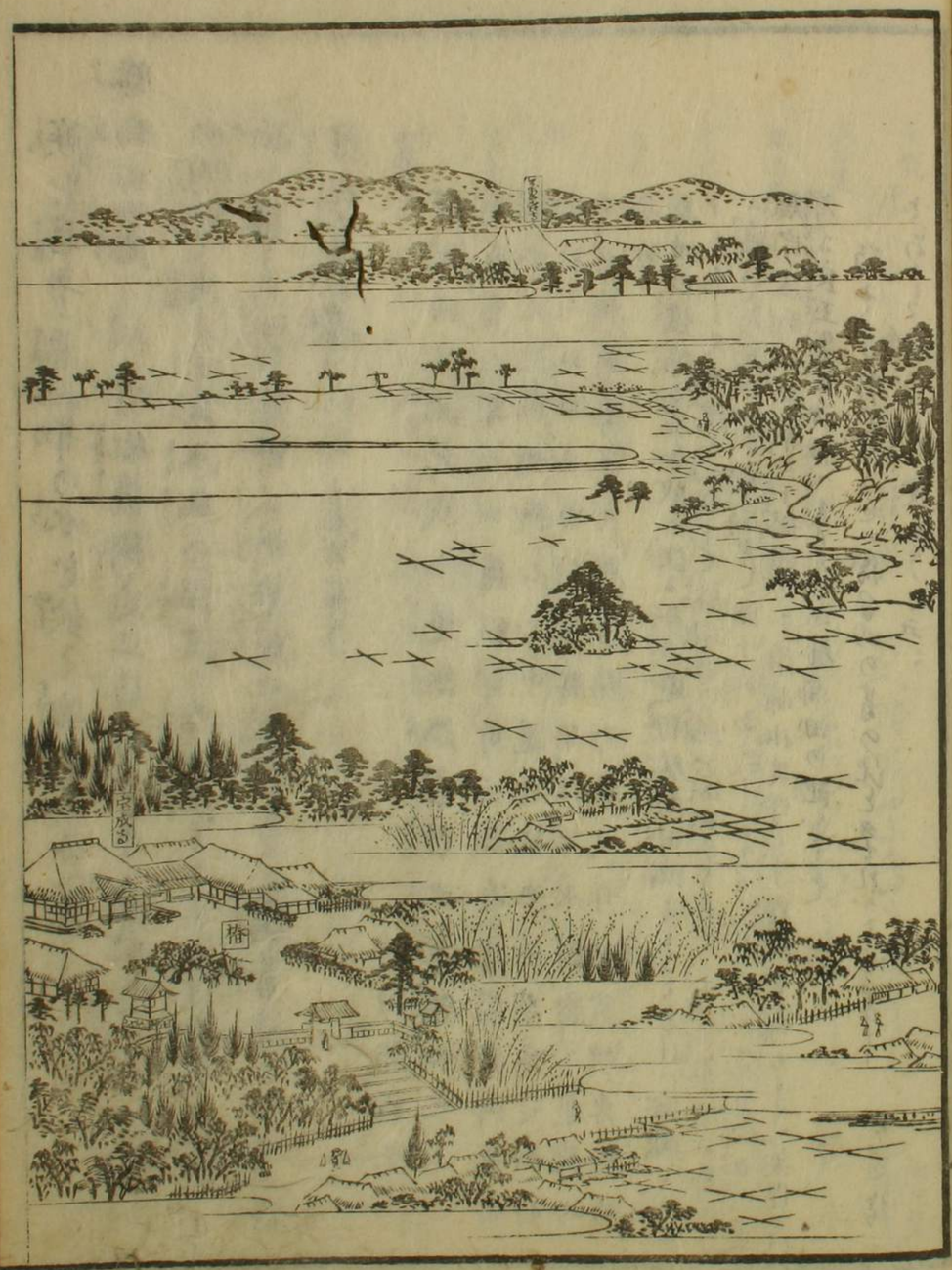
妙正池　中山より北の方二十町ばかりを隔て千束村となづくあり千束邑ハ千束の池とも弱く傳云文應元年庚申日蓮大士年三十九富木常忍の假る所の法華堂に入ゆゑ一百日の間妙法論を搏し群生を教導ゆゑ項此所の池靈婦女と化し日く彼地に至りて大士の説法を聽受し信心衆に越えて一時彼婦女来て大士に向て云く妄今尊者の法施を冠り一乘の真因を得たるを願くハ大士手書の本尊及ひ自の法号を賜ハるを乞大士乃曼荼羅を第し又妙正と号ふ法号を授ゆゑ婦女喜んで去人怪むて跡に隨ひ至るに此池辺にして其婦女の姿を見失ふ然に其本尊忽然として傍の櫻樹の枝にかゝりてあり衆人奇とせるに於て此池の靈なるを知て妙正と号け後一社に奉ると云り

小路とも称すなり

妙正大明神祠　同所にあり或姥神とも称せり　疱瘡を患ふる者祈念して驗ありと云日蓮大士に見えく本尊を乞たり龍女を祀所なり

葛飾明神社　中山より東の方栗原本郷の街道より左へ四町ばかり叢林の中にあり葛飾の惣社と称れとも祭神詳なら也同所真言宗萬善寺別當にて祭禮ハ九月十五日なり社より東の方に林間稲荷の小祠の傍に葛の井と称する井あり當社に清手洗と云土人相伝へく此井の水脈龍宮界に通ると云癒

葛飾明神社
葛の井
萬善寺
栗原寶成寺
寺の庭前ハ
椿の大樹あり
るさハ四尺ばかり
中ゝ枝乃
あつれ四方へ
四間ばかりあり
て壯觀あり


椿

疾を患ふる者此井の水を飲く驗ありとのへり

勝間田の池　同所舩橋街道の道傍にあり此所も栗原本郷村の内なる加ふ上氏本郷の溜池と唱ふ池より東ハ寺内村と云池より西小高ふ熊野三所権現の宮居あり萬善寺より兼帯

年祀を祭禮ハ九月十五日なり

万葉

勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之　新田部新王

右或有人聞之曰新田部新王出遊干堵裡御見勝間田之池感皆御心之中還自彼池不忍憐愛於時語婦人曰今日遊行見勝間田池水影濤々蓮花灼々可憐斷腸不可得言爾乃婦人作此戯歌專輙吟詠也

勝地吐懷編ふ右和歌の注ふ今日遊行勝間田池をもとあれハ餘國ふ出ぬ

[illegible]

類字名所和歌集ふ下総國しも清浦枕美作とす

考ふ良玉集ふ初瀬へ参りふ勝間田の池を

行ふ[illegible]ハ勝間田の苔の池と呼れ[illegible]

とあ[illegible]ふ奈良ふ便ありと云ふ　道濤

千載

後拾遺

[illegible]

新後撰

[illegible]

寄祝

[illegible]

夫木

[illegible]

日

[illegible]

家集

[illegible]

日

[illegible]

夫木

[illegible]

日

[illegible]

家集

[illegible]

日

[illegible]

新撰六帖

[illegible]

二条大皇大后宮肥後

範永

寂然

頭仲

為相

基嶺

京極

昭也

大貳

基綱

西行

和歌

勝間田池

栗原本郷邑の地にあり故に本郷の溜池と号く

万葉集

かつまたの
池を
われしる
もちすの
ちし

ちつ
ちつ
ちつ
ちきか
ことと

新田部親王

洗川　栗原と舩橋との間街道を横きりて流れ小川を号く
血洗川とも称せり　傳云右大将頼朝卿征
夷大将軍の宣旨を蒙られし後ハ其威勢実ハ草木も靡くと
なりぬれと意富日神社の神官の累代天子勅宣ふしく武門
幕下ハ度々の催促ありしとも是ハ應せぬ故ふ頼朝卿
憤り甚しく舩橋六郷の地を葛西三郎清重ふ給ふ清重此地ハ入
むとせれとも神人及ひ六郷の農民ら三神の神輿を前ハ皐居
西栗原ハ支へて防き戦ひ其乱さまふ止らさりしかハ終ハ神官
治部太補基義神輿の前ハ腰掻切て空しくなりぬ時乃
戦ハ神輿穢れしを以此川ハ洗ひ清めまりしく血洗川
と呼なりしとなり　或人云海神村の入口浅間より少し東の方の山より
流ハ源を蛇ヶ淵と号ける是小川を横きり舩橋街道を横きり海ハ
なりと按ハ此川の名を云ふ又頼義の太刀洗水と云源頼義の太刀洗川と称せ
義四年庚子十月豆州石橋の戦ひ敗れし後安房上總を経て下総の國府ハ
疑ふらくハ頼義ハ頼朝の誤なるべし

阿須波明神祠　西海神村ハあり禪宗大覚院奉祀を娑竭羅
龍王を祀ると云　故ハ此地を海神耕田と道路とを隔て海汀ふ向く
華表を建る九月四日を祭祀の辰とす此日芋を食ふを旧例とせ
故ふ土人芋祭と唱へり　当社ハ小柴村ハあり旅さんとせ
長途の安全を祈りまつるとて人首途ハ此阿須波の神ハ小柴を折りて
神の誓ひふく小柴を立て祈るを云と云　奇林良材ハ下総國阿取波宮とましく社ハ
万葉集
爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之阿例波
伊波々年加倍理久　麻豆爾　帳丁若麻續部諸人
新千載
名寄
あすハの宮ふさすの義をしらねハ称ハ為しき　定家
しられとあるハの邪をかへしめんるを神とふ小柴さして
石芋　当社の入口ハあり里俗ふ云く往古弘法大師東國化度の時日くれハ及ひ
ありく是を許しまつられとある孔ハ入口ハ一宿を乞ふ家ハ一人の老嫗
傍の芋を加持して石と化しあるとも此所ふ其芋四はとも腐れず七年を
生ずとなり　俊頼

意冨日神社初鎮座地　船橋驛舍の入口海神村御代川氏某ら地まあり日本武尊此海上ゆく八咫鏡を得給ひ伊勢太神宮の御正體とゝく鎮座あり〳〵旧跡なりとの〳〵今意冨日神社の地より此所近八丁許あり御代川氏昔ハ澪川より作る澪ハ水の深き所を〻〻訓義あく日本武尊を導まゐらせ此不の海の澪を志るし神鏡を得せしめ給ひしとの〳〵後裔あり其子孫今猶連綿こうとの〳〵

夏見厨海神村の北の方より今東夏見西夏見と唱へく二ヨ分る古伊勢御神の神領あ〳〵く意冨日社の神主是を務たり〳〵

神鳳鈔曰　伊勢太神宮造替遷宮事曰食米廿々

注文　二所太神宮御領諸國神戸御厨御薗神田名田

等合　下總國

夏見御厨　上分布三十段口入三十段一名船橋二百丁

神鳳抄ヨ其餘下総國あく相馬遠山形葛西猿俣萱田神保等共ヨ合せく五箇所とす意冨日神社傳ヨ〻〻万葉集ヨ

爾保杼里能可豆思加和世平爾倍須登毛曾能

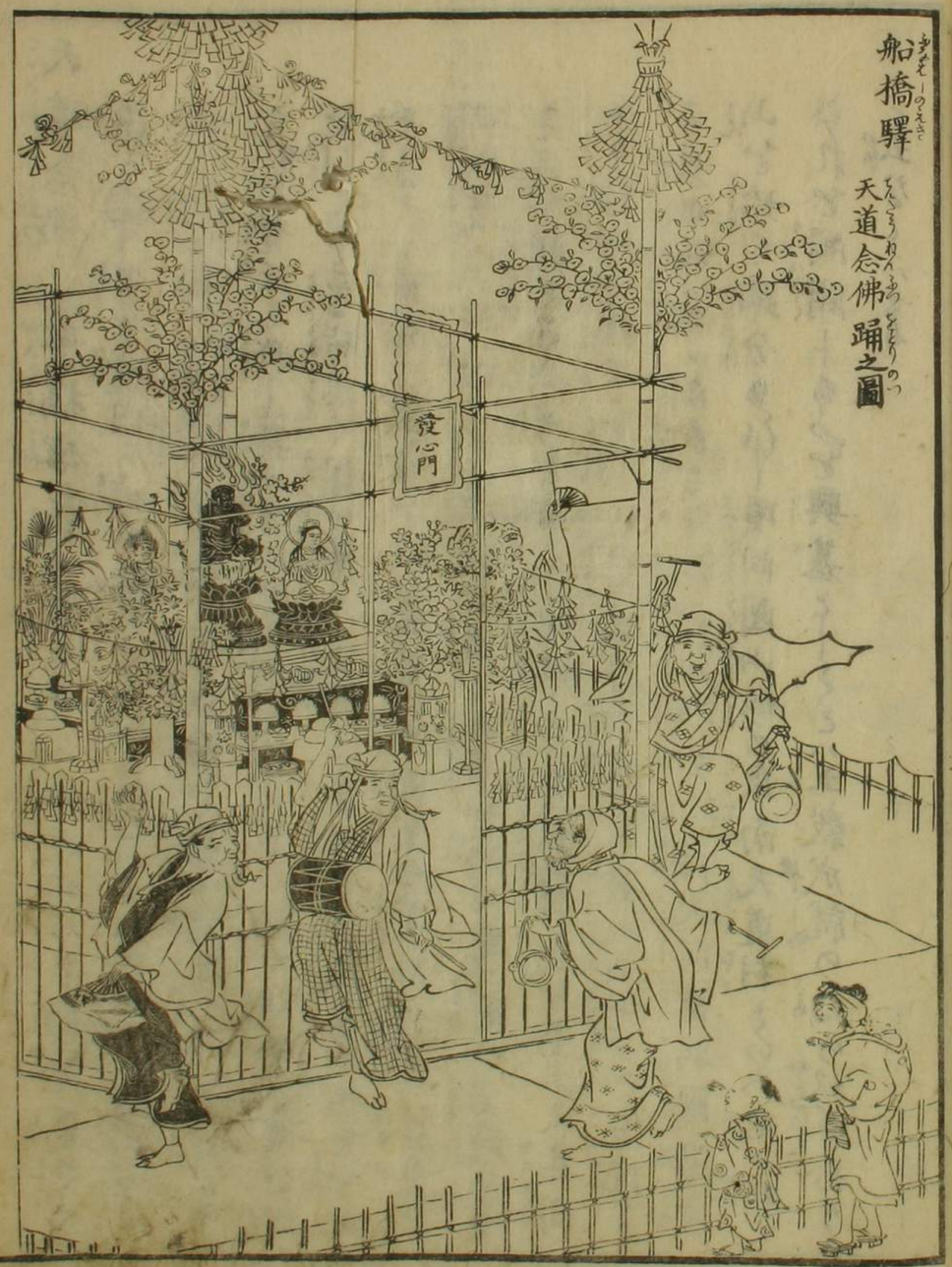
可奈之伎乎刀爾多氐米也母

かくよめるハ古葛飾の早稲をもて神に新嘗をいとなむと此和哥の
こゝろを此かつしかの早稲をもて祓ふ新嘗をしる後公へとゝりわく氏人も
をしめるく刈くる稲みなく費をしるく祭せしむ此日ハ門をさしるく凡の人の入来るを
忌まつるすなわち我うつくとやうの人の来んこゝろあのかを立せはしるく内へ入させん
とゝのへそなへたるこゝろをたゝるくいとなん

船橋驛

總名おしなべて古の神領の地なり舊名を湊郷と云とも相傳往古
日本武尊の東征の時此地に至りあひ海上おしなべて一面の神鏡をは
めくり其地を海外村と唱ひ依て其地に神鏡を遷しまつる然に干潟へ水無
月おしなべて旱ち續き官軍大に労る尊其祈禱ありしかハ驗ありしく二三
日の間大雨降續き官軍凱ひを唱へ竟に山徒を亡しまつり干後湊
郷の辺洪水おしなべて神鏡の宮所へ移遷ふへき便なりしかハ船戎
浮やしく橋とおしなべて此地名発るといふ 東鑑曰文治二年丙午三月十二日
庚寅左典厩の賢息首服を加へ
催促を加へおしなべき由とある条下に下総國船橋御厨院御領と云く

船橋驛　天道念佛踊之圖



天道念佛　船橋宮の内の東光寺及漁師町の不動院夏見の
薬王寺等の境内に於く執行せり毎歳二月十六日に始り同十八日に
終る　昔は一七日の間執行す　今は二夜三日とす　堂前に土を以壇を築き竹を以柱を儀
これを梵天と称し其四方に四の門を開き四十八柄の神幣を建注連
を引廻し参詣皆悉く諸の佛天に表しこれ内に大日如来の像を安し
て行ずるとし百味の飲食を供養せり　詰衆の道俗は各一昼夜に
間六度づゝ垢離して浄衣を着し白布を以て造る所の宝冠を頂
き三宝諸天の御号を称へて敬礼し六根懺悔の文を唱ふ又其間
中々弥陀の称号を唱へ鉦太鼓を打鳴して梵天の四方を右繞す
る数回昼夜に間断なし　相伝に往古弘法大師出羽國湯殿
山を始て踏分給ひし頃同國山形の東南天道村といふ地に於て
これを開闢しまを興基とこゝに五穀成就の願を祈るなり
と云なり

遠う澪　船橋の沖にあり俗釜の淵と号く土人の諺に云昔平
将門の愛妾桔梗前将門亡ひて後は流石に都へ帰らむも物
うくて船橋の里に暫しやすらい終に此海底に身を沉めしと
なり　此海の漁夫あり其漁する所の諸魚を市場料として江戸へ送る昔
大樹此地に至らせ給ひし頃その例にて今に廃せずとて又船橋宮
神宮へも捧まゐらせとあり故に此辺の海濱を御菜ノ浦と名つくと
社説に此海まゝ産まる所の諸魚の稚魚細にして魚を産する
あり鯛の腮に似たる形あり船橋宮神殿の内殺海波に映し自然に魚を産する
あり実に神徳四海に溢れ海神も感應あり云々と云

大峯山慈雲寺　同所二丁あり北の方新田にあり五山派の禅窟
ゝ鎌倉建長寺第二世佛光禅師開基の精舎なり本尊
釋迦如来は行基大士の作脇士は文殊普賢なり昔は盛大の
寺院なりしに永禄年間里見義弘の兵火に罹りて灰燼と化す
又此時當寺の鯨鐘をも國府臺の陣へ奪はれしに謬て利根
川へ沈めしとて今其處を字して鐘の淵と唱へり　國府臺の条下に詳なり
宝暦中徳巌といふる禅僧
再び鐘を造るとい

意冨日神社　意冨日古ハ日を比ゝ作る天正以来船橋驛上總海道台命ありて比を日ゝ改らるとゝ

成田海道との岐道五日市場村ゝ宮居す世ゝ船橋太神宮と称せ延喜式内の神社あーく関東一之宮と崇む神宮大宮司冨氏奉祀せり

當社大宮司冨氏の始祖ハ景行天皇第四の皇子五百城入彦尊なり天皇船橋ゝ下向なさしめ給ひ東國八千八村の縣主悉當宮の神官を司らしめ給ふ然ゝ仁平の頃荒木田滿國の舎弟基國を養子とす其後基継の時又嗣あきふ依く千葉滿胤の子基胤を養子とす此時日月を以て家の紋と

せり天正十九年辛卯大神君當社に泰指の頃神官冨氏御紋の軍配團扇ゝ根引の若松を添て献りしに其後上意よりて若松ゝ軍配團扇を家の紋とす同年二月年始ゝハ旧例ゝ任せ清祓大麻ゝ根引の若松を添て献上しまつり登城もまた永規とす

本殿祭神　天照皇太神宮　左八幡太神宮

豊受皇太神宮　二座相殿　右春日大明神

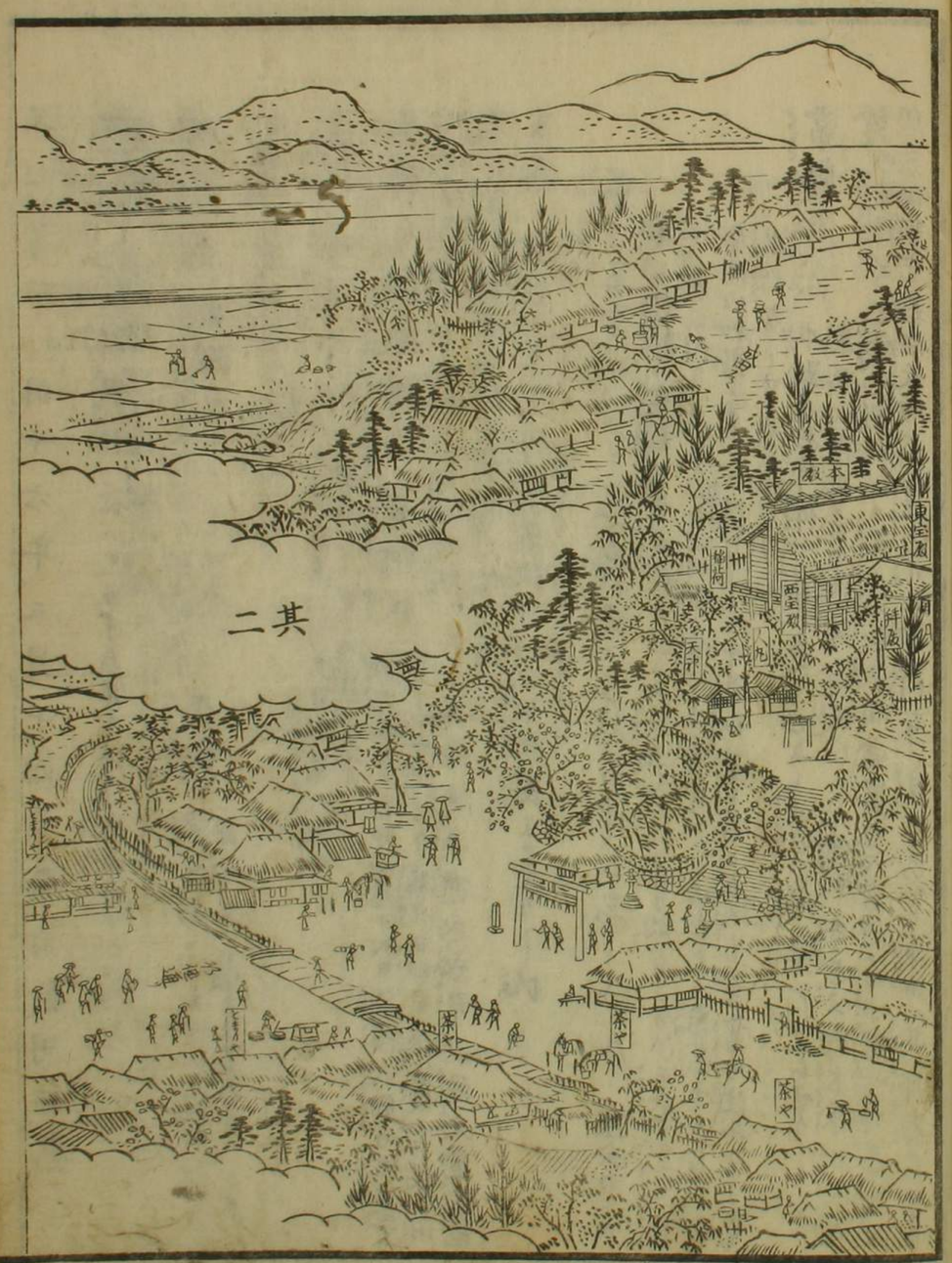
延喜式神名記曰　總國葛飾郡二座

茂侶神社　意冨比神社云云

三代實録曰　貞觀五年五月二十六日戊子授下

又總國後位下　意冨比神正五位下

同書曰　同十三年四月三日己卯授同神正五

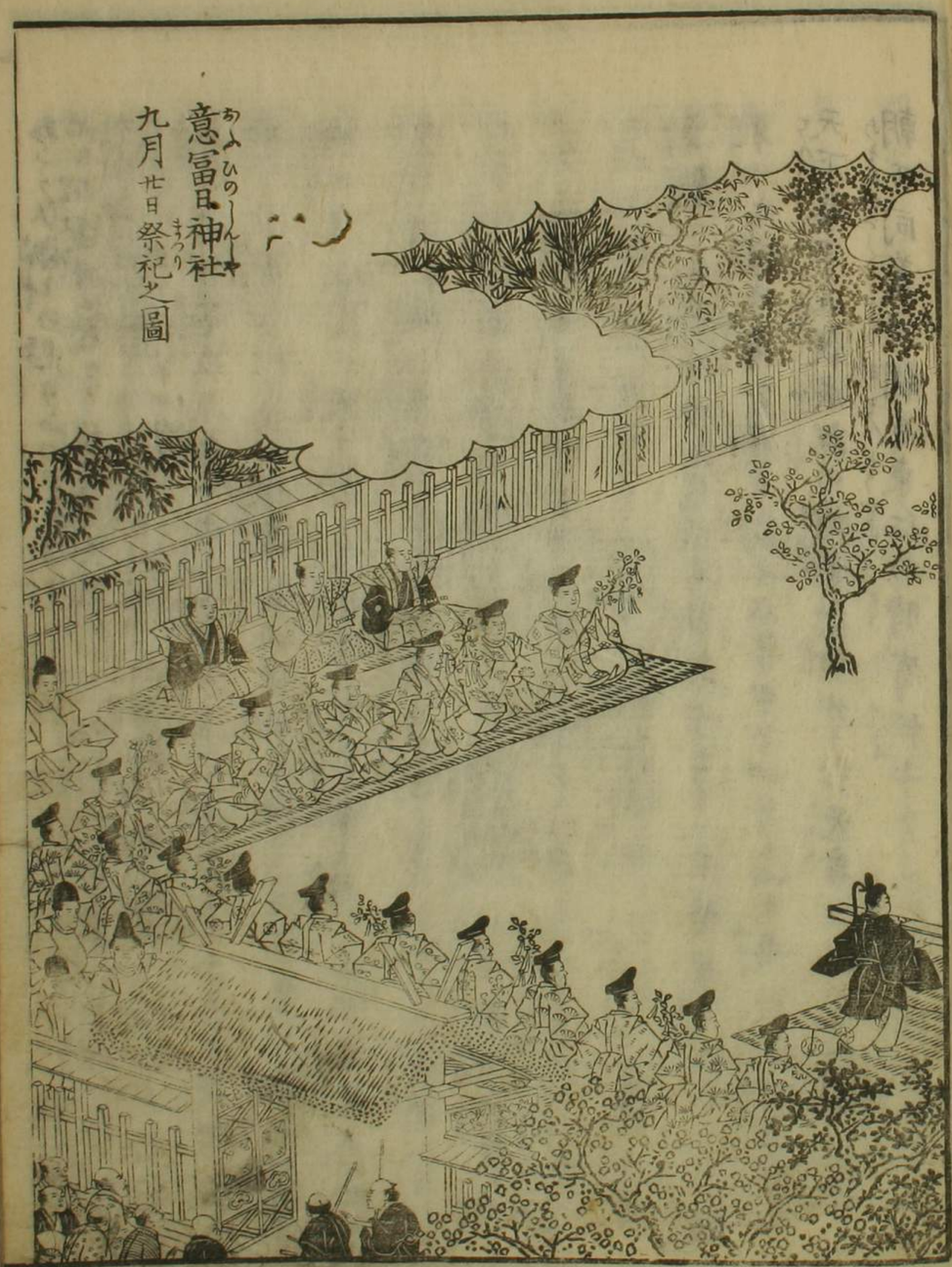

二其
本殿
東宝殿
西宝殿
茶屋
茶屋

神庫
外宮

又同書曰　同十六年三月十四日癸酉授同神從
四位下
神寶　叢雲御劍　長一尺五寸あまり折れて来由ありと云へとも
神息劍　長一尺もとより日蓮大士　木劍　題も同し大士の納らるゝ所也　長さ八寸ばかり
拵も拵く其所全し
奉納ありしとい
近衛帝　宣尓　仁平元年辛未六月十日船橋六郷の地を寄附し給ふ　宣尓なり
千葉介満胤神領寄附状　兼久元年己卯四月十六日船橋六郷の地を寄附する由記せり　其文に曰東限覆宮塚南限海西限洗川并沓懸北限石枝路とあり　其餘應長應永永享永禄文亀元亀等の古文書多し　姑是を省て記さず
家集　建保六年十月素還法師時乱行下総國に入りし比
のちのちさすらへ久方の天てらす神も空ふかくん　法名右大臣
按ふ社記に実朝公寄附の日當宮に参詣す　乱行軍に代りまかり一七日の間當宮に参籠ふかく
奉納の和歌とあるも千葉何某とあるも又言葉書の注ふ
常盤御宮　本殿の右神林山の麓に建たせ給ふ四方に瑞籬を繞らせり
東照大権現宮の御神影　大将軍秀忠公御木像　日本武尊の御像を合て安座す　元和年間當宮の大宮司冨中彩太捕基重此
息男伊勢守基治天海大僧正と共に勧請なすとつたへ来由ハ其憚あるとして

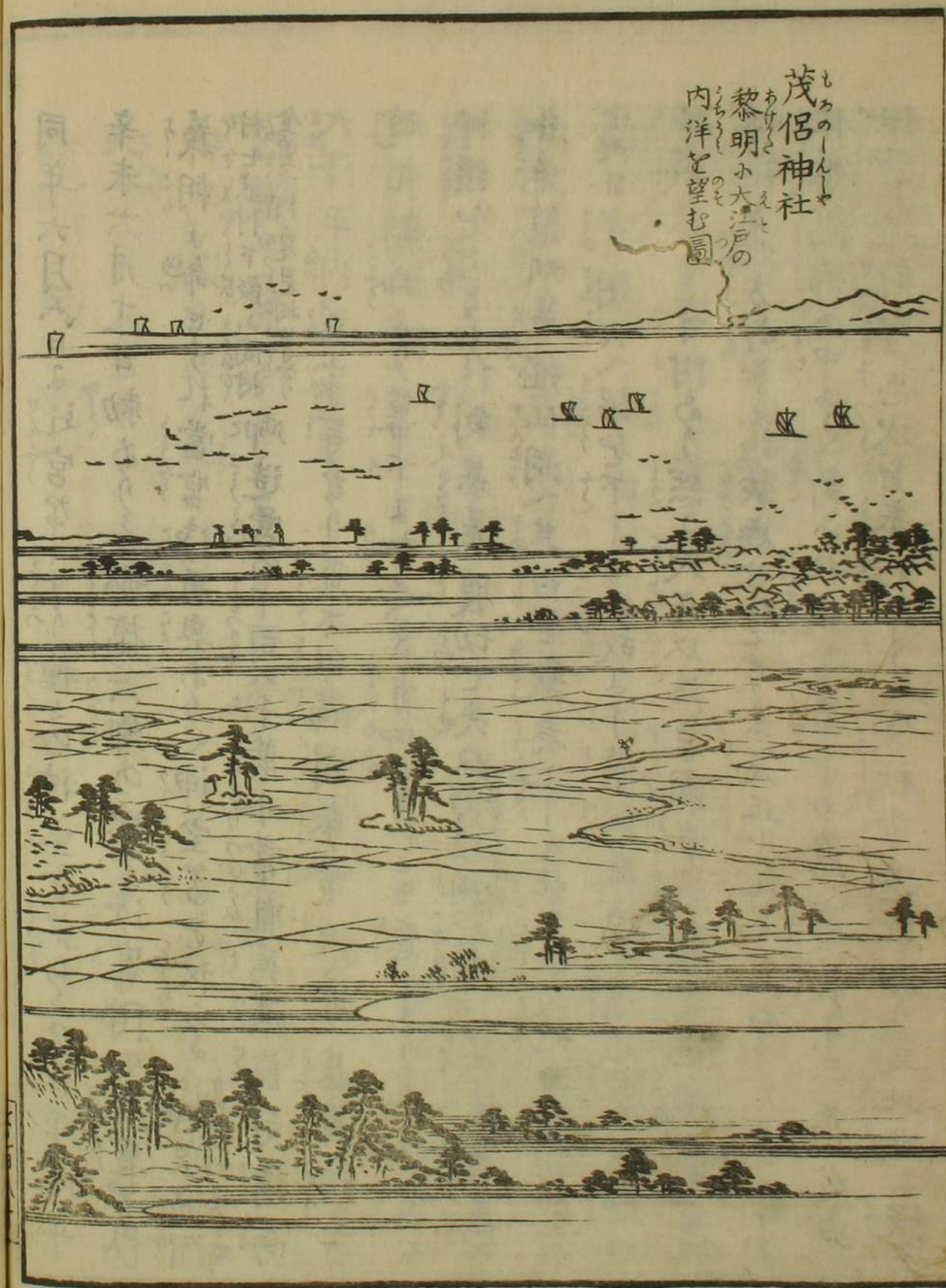
載せず　毎歳四月十七日祭礼あり　都鄙より来りて敬拝す　同夜近里の童
女集り廣前に於て唄踊り躍りあり　古雅ある習俗なり　是を初負脊
と号す　天正九年辛卯當社御造営の万葉集菅餅早稲を贄すとあり
按ふ初負脊ハ初穂稲なり　又ふんすとあるも早
稲を和世と訓む此例によりて稲を世と訓ん　公ハ公民の所より至り
至り登る所の新稲を祝ふ新嘗　前に取分置く米粉を搗て或ハ至誠の人
ふ供　今世俗人民の所より発る習俗なり　延喜式にも初穂の事
あり　文字荷前に作り波津本と訓ん　江次第曰荷前者四方國より進る御調荷前
取奉故云荷前　又三代実録にも新銭を神に奉る事あり　茶下に所鋳作
之早穂二十文云云又倭姫世記に先穂を波賀良と訓ませ　初穂と云ふ同し
時ハ初負脊と云ハ初穂稲の訛なり　往古郷民新穀成就の賀宴を做け
り　堺に唄ひ舞ふ習俗なり則新嘗の遺風なり

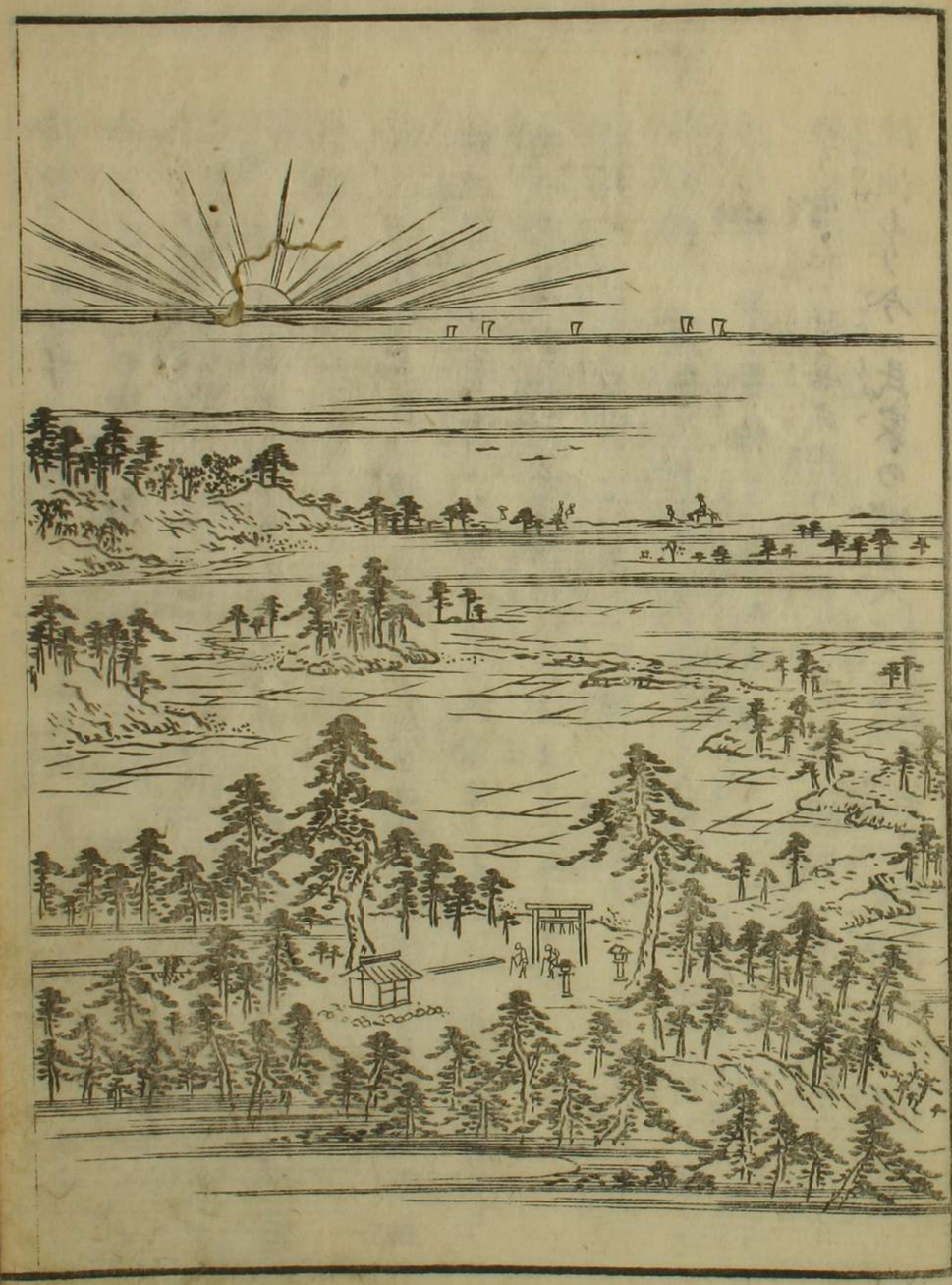
斎殿　同所大宮司の構へ傍てあり　御饌殿　同所なる御進の都場なり　御供
當宮のものの勤なり
社記曰景行天皇四十年皇子日本武尊東夷征伐の勅を蒙り発向
しまふ頃此地に於て伊勢大神宮へ凶徒調伏の御祈誓ありしハ
其時海上に光を現し一ツの船の中に神幣を採添る弱木に一面
の神鏡の懸れるあり　尊是を得給ひ則大神宮の御正體と崇め
夏見郷に宮殿を建て崇まつりぬ　其神鏡今猶當宮の御正體と崇め
既然りと云又守るの命ふ


意富神社
九月廿日祭祀之圖

考へうひ海上の光りみつゝく弗法を求と者を求と味ひ求とそ求の法今も
九日市場村に存せり同時函徒御代の虎矢を刺く者を矢刺とよひ流
と號けく共に當宮の祢へ[illegible]ハ矢はきく此所神一時邑君に祈かゝるまゝて
我を是伊勢國五鈴の川上より天降る神あり今ありを其神垣と
等しく崇へしと云云依尊其由を帝に奏しゆひしに伊勢太神宮を
朝日宮とあらめ夫に對して當宮を夕日宮と称しゆひ天皇第四の
皇子五百城入彦尊をしく船橋に下向あさしめられ東國八千八
村の縣主兼當宮の神官たゝむ（當宮神官冨氏の始祖）其年新嘗の祭を行
後豊受皇太神宮を合祭しまりく二座とし又左右に八幡春
日の両神を勸請ありく三社と其新穀を嘗りし地を今も清和天皇の
貞觀十三年辛卯三月三日勅願ありく奉幣使下向ありく関
東一之宮の號を賜り同十六年甲午四月十四日再勅使下向ありて
天下泰平五穀成就の祈念を命せしむ天喜三年乙未源頼義
朝臣同義家朝臣東征の時寄願ありく當宮を修造ありく

同年六月六日に遷宮なしまり種々の神宝を納らる又仁平元年
辛未六月十一日勅ありく船橋六郷の地を沙寄附の院宣をゆひ
義朝に命せられ當宮沙再興ありて神宝を収らる（六郷とハ所渭高根村米ヶ崎村七鉄村下飯山間村金曽木村夏見村等なり）御造営の下司ハ千葉介常胤美濃前司清高
大澤平内兼家等なり荒木田満國奉幣使なり基義神主の
時頼朝卿より幕下に加へきに肯仰あれとも應せさりしに悉く
神領を打とられ剰基義腰切て失ぬ（前の洗川の条下に詳なり）其後基義の
舎弟権ノ基継仙洞へ其由を歎奏上しられハ兼久元年己卯四月
十六日實朝公へ詔を下しゆひ故に千葉満胤より昔のまく六郷の
神領悉く寄附あり然に天文以後東國乱戦屢發し頃當宮ハ
神領も大方打とられ衰廃せんとせふ天正十九年辛卯　台命に
依船橋郷の中に新に社領を寄しゆひ慶長十三年戊申
伊奈備前守忠次を奉行として宮社沙造営あり又此地に假に

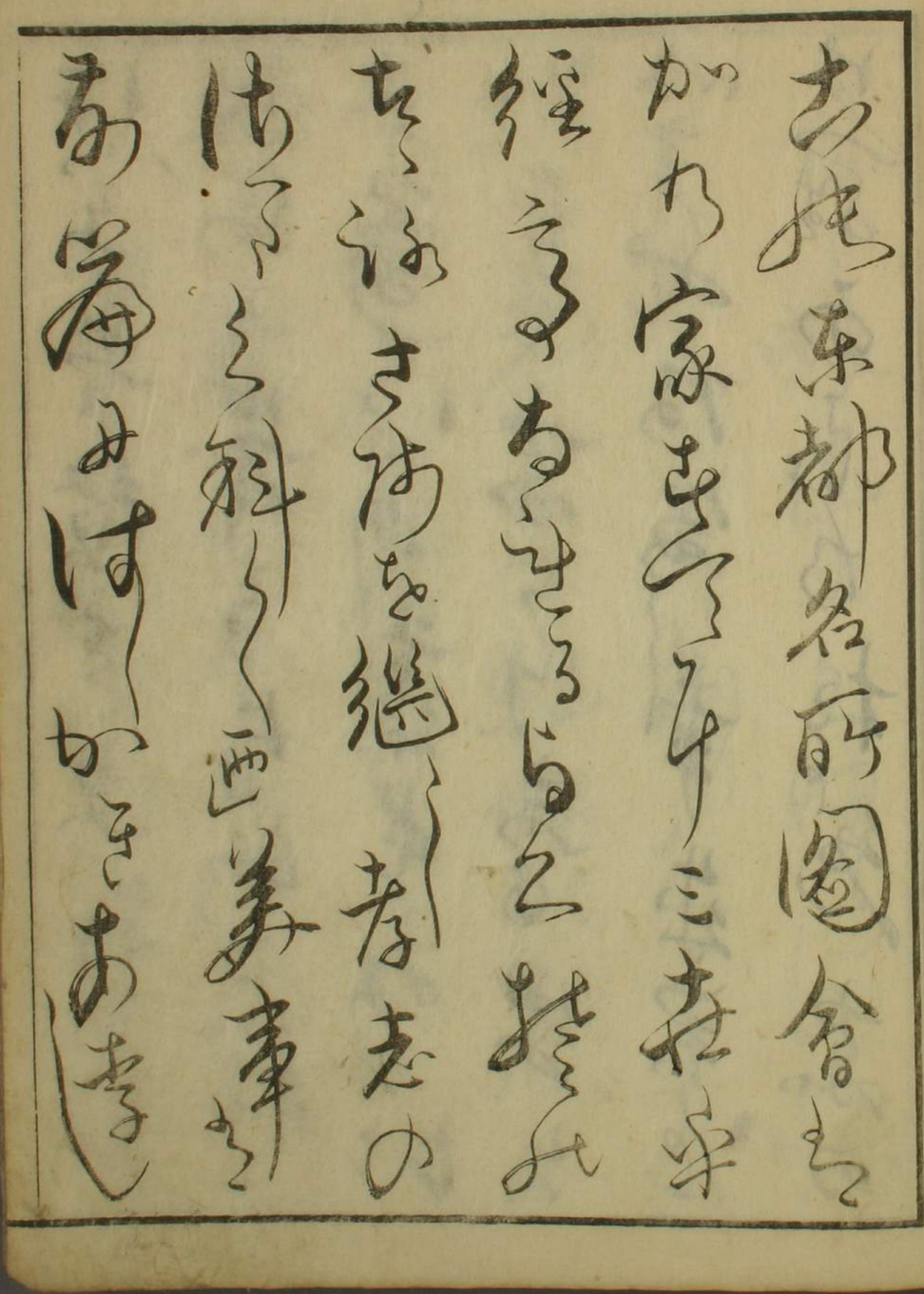

茂侶神社
黎明ホ大江戸の
内洋を望む圖



御殿を建させ給ひ時とてこゝふ入御まゐらく洪崇敬尤厚く
御武運長久の御祈禱を命せらる始ハ神官冨氏の家を假の洪旅
建ものゝ神宮の家を八同所田中との地へ移し後洪殿を
宮営の洪勅ハ神官冨氏へ賜ハり再ひ元の社地へ迂り住る反ふ今飛橋
彩と唱へ宝暦十一年辛巳勅許あり古往の例に任せ毎歳
鳳闕に洪祓をまるゝとハなりぬ
當社の祭祀多き中ゆも正月十六日の洪神楽二月卯日の五
穀成就の神楽殊に九月廿日ハ大祭ゆゝく其式甚古雅なり
前の日ハ角力奥形あり此形ハ天正十九年辛卯
東照大神君當宮へ御泰宮の時　上覧ありしとあり其余の形ハ
茂侶神社　意冨日神社の摂社ゆゝく同所より六丁計を隔て
東の岡にあり祭神ハ木花開耶姫一座なり故に浅間山乃号
あり當社ハ延喜式内の御神ゆゝく葛飾郡二座の中なり洪手
洗池あり今ハ民家の地に入或人云茂侶神社ハ同郡小金領栗ヶ澤村に
あるゝく社司ハ支野氏祭神ハ日本武尊なりと云

三代實録曰　元慶三年九月二十五日壬子授下
総國正五位下茂侶神正五位上云云
此社地ハ海濱に臨たる砂山ゆゝく松樹繁茂せ西南の方
低く前に南総の驛路を見下し後ハ岡續ゆゝく成田の街道
東北に繞る富嶽の白雪房総の翠巒筑波の紫霞も共に此地の
眺望に入りく風光最秀美なり例祭ハ六月一日に行ふ
柳営に此の根の若松ハ當社の（隔年正月年始の時）
地より擇とるを旧例とせり

編輯　松濤軒齋藤長秋
校正　男　藤原縣麻呂
仝　縣麻呂男　月岑幸成
畫圖　長谷川法橋雪旦
剞劂　東都　佐脇伊三郎
朝倉伊八
宮田六左衛門



ほとゝぎす聲も
ちかくなり
さつきまつ
おなじ
いまもなほ
はつ
かつ
ほとゝぎす
聲
なつかしき
燈
光
駆
物
本
接
合

ほかにはけ和らく於艾れ
等ゝ僅尓支那趣中に
あまたゝび絵のさま伝を
得たるは今更に痛なる
家学もいまみの志なき人
造微志川東未於ある

志の由を筆にしるしはへり
あるはなき事に許稚
撿舶来絲局官商
上田兼憲

菫齋盛義書

拾遺 江戸名所圖會 全五冊 齋藤月岑編述 長谷川雪旦画圖 近刻

東都歳事記 全四冊 全 全 近刻

箱根熱海 温泉名勝圖會 全三冊 藤原縣麻呂遺稿 長谷川雪旦画圖 近刻 同 雪堤補画

天保七丙申青陽 日本橋南一丁目 須原屋茂兵衛
東都書舗 浅草茅町二丁目 須原屋伊八

三都發行書林

京都寺町通松原下ル　勝村治右衛門
大坂心齋橋筋唐物町　河内屋太助
同心齋橋筋安堂寺町　秋田屋太右衛門
江戸両國吉川町　山田佐助
同神田鍛冶町二丁目　北島順四郎
同淺草新寺町　和泉屋庄次郎
同芝神明前　岡田屋嘉七
同日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同横山町三丁目　和泉屋金右衛門
同今川橋本銀町　永樂屋東四郎
同日本橋通二町目　小林新兵衛
同神田通新石町　須原屋源助
同日本橋通四丁目　須原屋佐助